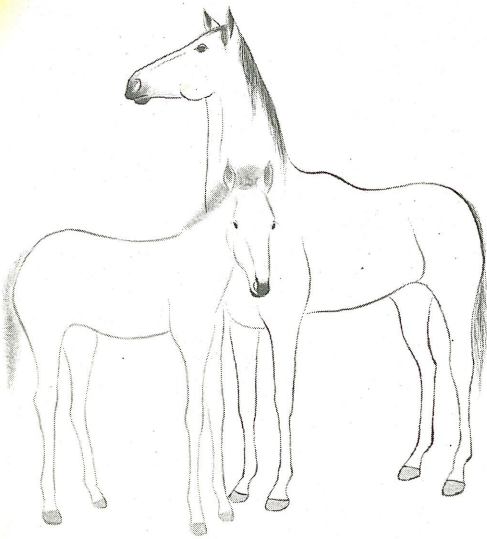


幼児の教玄月

第八十卷第三号

日本幼稚園協会

家庭・保育所・幼稚園

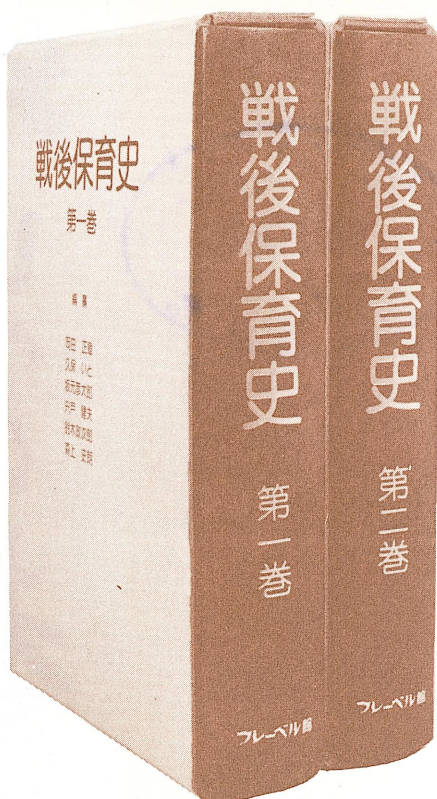


3

戦後保育史〈全2巻〉

A5判・上製本・セット定価・9,800円

編纂 岡田正章・久保いと坂元彦太郎・穴戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗



好評発売中!!

★日本で初めての“戦後保育史”です。

幼稚園・保育所・幼児文化の三面から展開されている戦後保育史は、日本で本書が初めてです。

★行政も現場の動きもよくわかる戦後保育史です。

法令や制度の背景、現場の受けとめ方などが浮き彫りにされていて、保育の歴史を総合的に理解することができます。

★豊富な証言による生きた戦後保育史です。

歴史の第一線で活躍された方々の証言により、当時の状況が手に取るようにわかります。

★貴重な資料がいっぱいです。

貴重な資料により戦後保育界の真実を伝える保育史です。全国各地の地方史も含まれています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館



幼児の教育

第八十卷 第三号

幼児の教育 目次

——第八十卷 三月号——

© 1981

日本幼稚園協会

幼児教育に求められるもの……………	関口はつ江……………(4)
保育所の定員規模別にみた集団保育の検討……………	千羽喜代子……………(6)
歴史人口学からみた生と死 三……………	鬼頭 宏……………(14)
鳳の声・鶴の声……………	竹田扇之助……………(25)
続・保育の中の小さなこと大切なこと ⑤……………	守 永英子……………(36)
思い出草・二……………	和田陽平……………(38)



わたくしのシルクロード ⑩……………横張和子…(43)

『復刻・幼児の教育』並びに懸賞論文募集の

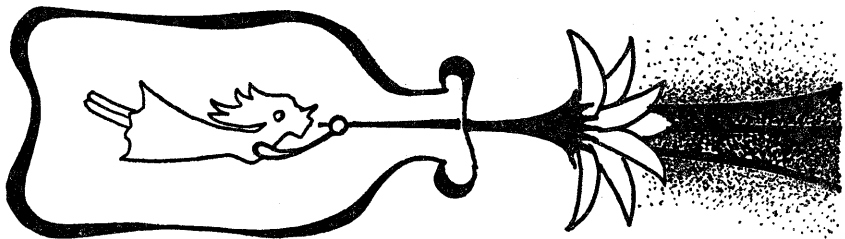
お知らせ……………(52)

クダケスタン・ジャポニ(イランの日本人

幼稚園)②……………進藤君枝…(54)

書評……………(60)

表紙・中村 宗弘
表紙題字・比田井和子
カット・福田 理恵



幼児教育に求められるもの

関口はつ江

現代は高学歴社会で、それぞれの人が社会に出るまで、ほぼ二十年の準備期間をもつようになった。十二、三歳になれば仕事をしなければならなかった時代に比べれば、格段の違いである。生活の糧を得るための労働から解放され、自分らしさを探求し、物事の本質を追求することの許される自由な、保護された状態が長くなっているから、すぐれた個性が輩出してもよいはずと思われているのであるが、種々の調査等によれば、没個性的で、意欲のない若者が増えている現状である。

社会の進歩、文化の発展に伴い、社会に適應するために、子どもに課せられる学習量が増え、社会化のための圧力が強まることはやむを得ないとしても、三、四歳から開始されるに至った集団教育の内容が、これでよいのかどうか、根本的

に考えてみる必要がある。幼稚園振興計画が実施されて以来、確実に就園率は高くなってきたが、逆に子ども問題は増大し、深刻になるばかりなのである。

保育は、簡単に云えば、ねらいが定められ、ねらいに合う活動が選択され、教師が活動を指導して行くもの、と考えられているのが一般である。しかし、そこで教師が定めたねらいや活動は、幼児の本質をふまえてみて、ひとりひとりの人生の積み重ねの基盤となる幼い時期の一日一日に対して、本当にやらねばならないことであるのかどうか、深く問い直されているのであろうか。

社会の流れの中で、勝手にきめられた価値基準の枠（素直な子に、たくましい子に、集団行動のとれる子に……）の中で、こま切りに作られ、制限の多い活動の枠の中に閉じこめ

て展開する保育は、大学に入るための高校教育、高校に入るための中学校教育……と到達点を定めた学校教育のもつ弊害と全く同質のものをもってしていると云えよう。

また、子どもとかわるおとな達は、おとな同志の社会の厳しさに対応する真剣さで、研究や芸術に打ち込む情熱をもって、子どもの世界に相對しているであらうか。多かれ少なかれ、権力者として、保護者としての優位性によりかかって、安易に子どもを扱ってはいまいか。子どもが無知であり、純粹であることをいいことに、ずいぶん勝手な扱いを、それもやむを得ずではなく、教育という名のもとに行なっていることがどれ程あるか、振り返ってみなければなるまい。

幼児の教育は遊びを通して行なうべきものであり、遊びは子どもに任せてしまわずに、適切に指導しなければ発展しない、ということとは保育をする者の常識になっている。しかしこのことは慎重に考えられなければならないことなのである。遊びですら子どもに任せられることなく、おとなが入っていくのであるから、子どもが遊びに打ち込む真剣さと同じの、否、それ以上の真面目さと開いた心をもってその世界に入って行かなければ、真の指導はできないのは当り前のこと

である。しかし、残念ながら本物の遊びの指導のできる保育者は非常に少いように思われる。子どもに無限の可能性があるといいながら、おとなのつまらない常識と情性的なかわり方で、子ども自身にとっての生活の意味を失わせてすらいることも多いと思う。

幼児教育を担当する者が不真面目であるとか、幼稚園教育要領に異論があると云うつもりはないが、科学にせよ、芸術にせよ、急速な進歩を遂げつつある現代において、子どもの教育にかかわる部分の弱さについて、もっと深刻に受けとめるべきではないかと考える。それは、文明にひきずられることなく、人間の生物学的特性をふまえて、原始的で、混沌とした、人間の根源を深く掘り起こし、支える分野として、如何にして、人間の機械化の流れに對抗して、確実に子どもの本質を守り、人間らしさを育てるかを考え実践することである。

現代社会の不調和を回復するためにも、子どもとかわる領域にある者の主体的な行動が必要とされているのではないであろうか。

(郡山女子短期大学)

保育所の定員規模別にみた集団保育の検討

千羽喜代子

一、保育所の定員規模について

保育所の設置認可において、その定員は六〇人以上とし、措置児童のおおむね二割以上は三歳未満児を入所させるものとし、かつ、定員のおおむね一割以上を二歳未満児とするとして規定している。さらに、昭和四十三年度から都市及びその周辺地域において、用地取得の困難あるいは、いわゆる無認可保育施設の解消の一環として、保育所の定員を三〇人以上六

〇人未満とする小規模保育所制を実施している。

このように、保育所の定員については下限は規定されているが、上限は規定されていない。特に、昭和四十年代以降の経済成長の結果として既婚婦人の職場進出、核家族に伴う家族構造の変化、人口の都市集中に伴う家庭を取り巻く生活環境の変化等は、両親の養育意識にも影響を与え、保育所の相対的役割を質量ともに増大させた。

あわせて、保育所規模においても、大規模施設が増加した。昭和四十年次から昭和五十二年次まで（ただし、昭和四

十一年次の資料は欠如している)、十二年間にわたる定員規模別保育数から、二〇一人以上と二五一人以上二〇〇人までの定員規模の年次推移を図一に示す。二〇一人以上の定員規模は、昭和四〇年次は全保育数の〇・九二%と二%弱であったが以後漸次増加し、昭和四十八年ではやや増加し、五十二年次では二・七八%を占めている。同様に、一五一人から二〇〇人の定員規模の年次推移をみても漸次上昇し、昭和四〇年次の二・三四%に比較すると昭和五十二年次は五・七七%と約二・四倍の増加であり、一五一人以上の定員規模と二〇一人以上の定員規模の保育所を併せると、全国保育所の八・三%となり、昭和四〇年次三・二%の二・六倍である。因みに、定員三〇一人以上の保育所を全国的にみると、公立九園、私立二八園である。また、東京、大阪、名古屋の大都市において二〇一人以上の定員規模をもつ保育所は九〇園であり、その最大規模は五〇〇人に達している。

最近の動向としては、一五一人以上二〇〇人以下の定員規模は依然として増加しているが、二〇一人以上の定員規模の保育所は昭和五十二年次より減少の傾向にある。

このように保育所の定員が大規模になる理由として以下に示す幾つかの理由が考えられる。

① 都市部、人口増の地域に多いこと、それは要保護児童の密度が高いことを示している。

② 都市部においては、用地確保が困難であるため、一施設を大型化しなければならないこと。

③ 過疎地においては、施設の総合化が行なわれたこと。

④ 労務管理の上から、一定数の職員による勤務体制を整えるためには、定員規模が大きい方が容易であること。

⑤ 措置費の単価は、一五〇人以上になると有利であること。

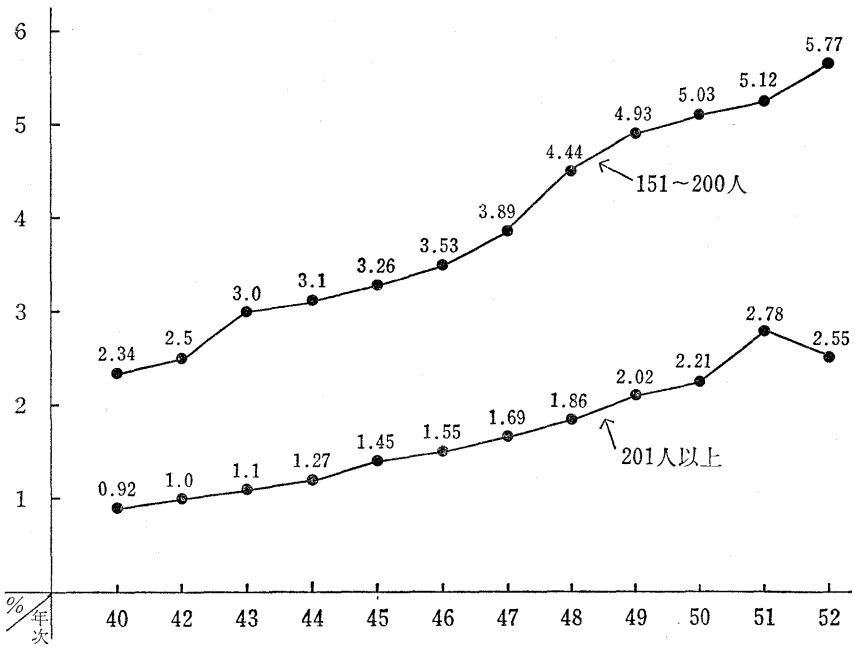
⑥ 経営の安定化をはかる意図があり、さらには利潤をねらう意図を持った園があること。

外国に関しては、資料を収集することが難かしいが、一般的には、徒歩通園の可能な近隣に設置することを原則にしているため、小規模である場合が多い。例えば、表一は一九六八年のイギリスの例であるが、定員二〇一人を超える園は一園もない。(表一の出典は「諸外国の保育・幼児教育制度」)

二、保育所規模別集団保育の検討

われわれが採った範囲では施設規模に関する研究を見出す

図1 定員規模201人以上の年次推移



ことはできなかった。わずかに保健衛生の面から、M. Plan-
rdler は、施設内感染は保育児数が増す程、加速的に増加し、
人では $\frac{1}{2}$ だけの機会が生ずるため、大流行を予防す
るには、保育児数をなるべく少数にすることが大切であると
述べ、Booth 博士は一保育所には四〇名以上収容すべきでない
と言っている。しかし、これらの資料は古く、予防医学の進
歩から施設内感染の減少した今日、この問題は配慮の対象と
はなりにくい。

今回われわれが行なった研究は、昭和五十四年度厚生科学
研究費によったものである。直接に関係する文献がないまま
に、現状をみつめ、集団保育の効果を最大限に発揮するため
の定員規模を明確にすることを目的とし、以下に示す手続に
よって対象園として、定員二五〇人以上の大規模保育所一二
〇園、六〇人から一二〇人までの小規模保育所一二〇園を抽
出した。

すなわち、全国児童福祉施設一覽保育所篇を参考にし、二
五の都道府県において、昭和四十七年七月現在、二五〇人以上
の定員の保育所総数は一二〇カ所であった。対照群としての
小規模保育所の数は遙かに多いため、定員二五〇人以上の大
規模保育所と同一都道府県内で距離的に一番近接している定

表 1 イギリスにおける規模別保育学校・初等学校数 (1968年 1月)

種 別	規模別										1968年 (計)	1967年 (計)	
	15人 以下	26 ~50	51 ~100	101 ~200	201 ~300	301 ~400	401 ~600	601 ~800	801 ~1,000	1,000 以上			
公 立	保育学校	37	380	184	31	0	0	0	0	0	0	632	614
	初等学校	1,385	3,119	3,846	6,053	6,267	3,544	2,247	329	62	14	26,866	26,826
	計	1,422	3,499	4,030	6,084	6,267	3,544	2,247	329	62	14	27,498	27,440
私 立	保育学校	5	10	5	0	0	0	0	0	0	0	20	20
	初等学校	2	9	38	88	33	4	7	1	0	0	182	184
	計	7	19	43	88	33	4	7	1	0	0	202	204
独立 学校	保育学校	99	51	20	0	0	0	0	0	0	0	170	191
	初等学校	277	343	610	546	110	16	6	1	0	0	1,909	1,962
	計	376	394	630	546	110	16	6	1	0	0	2,079	2,153
全 体	保育学校	141	441	209	31	0	0	0	0	0	0	822	825
	初等学校	1,664	3,471	4,494	6,687	6,410	3,564	2,260	331	62	14	28,957	28,972
	計	1,805	3,912	4,703	6,718	6,410	3,564	2,260	331	62	14	29,779	29,797

注) ①公 立 Public school……………わが国でいういわゆる公立である。
②私 立 assisted sector……………助成を受けている私立。
③独立学校 independent……………助成を受けていない私立。

員六〇人以上二〇〇人または二二〇人までの小規模保育所を同数ずつ抽出して一二〇カ所とし、合計二四〇園を対象園とした(表二)。

(一) 保育所見学から問題点を探る

調査を行なうにあたって、まず大規模保育所の見学をすることによって、その実態を知ることから始めた。都内および都下の大規模保育所、定員五八七人、四一人の二カ所において、大規模保育所で問題になっている情報を収集し、さらに協同研究者の体験などを含めて、次のような問題点を明らかにした。

園長に関して、

- ・ひとりひとりの子どもを掌握することは園長業務の一つであるが、それが難しくなること。

- ・親との親密な関係を保ちにくくなること。

保育者に関して、

- ・保育者が子どもの名前と顔を記憶するのに時間がかかること。

- ・管理上の問題から統制の多い保育になり、それが一、二歳児にまで及んでいること。

表2 都道府県別対象園

都 府 市	青	千	東	富	石	山	長	岐	静	愛	三	京	大	奈
森	葉	京	山	川	梨	野	阜	岡	知	重	都	阪	良	
大規模 250以上	1	5	10	3	5	2	5	10	2	33	1	5	3	3
小規模 60~120	大規模と同地域に同数													
都 府 市	岡	広	徳	香	高	福	佐	名	京	大	福	計		
山	島	島	川	知	岡	賀	古屋	都	阪	岡				
大規模 250以上	4	4	2	2	4	1	2	6	1	5	1	120		
小規模 60~120	大規模と同地域に同数											120		

・大規模になるほど保母間のチーム・ワークが不可能になり、それが子どものけんかなどが生ずる原因になりやすいこと。

・職種が分化しやすいこと。このことは、チーム・ワークが難しくなることの原因となること。

子どもに関して、

・子ども同志が名前を記憶することが難しくなること。六〇人以下の場合は比較的容易であるが、一〇〇人以上になると容易ではないこと。

・子ども同志の衝突が多くなること。

保育内容に関して、

・行事が多いこと。また、大きな行事が一斉に出来ないため、例えば、午前と午後に分けることもあること。

・静かな時間が保ちにくいこと。子どもの数と騒音、それに伴う保育者の疲労が重なること。

建物に関して、

・施設が高層化になりやすいこと。

これらの問題点を加味しながら、一九五八年に行なわれた「保育施設の最低基準の設定に関する研究」を唯一の手がかり

りにしながら、①子どもの環境としての保育所、②保母の子どもの掌握、③保母と子どもの接触、④子どもと子どもの接触——の四調査項目および十六の質問項目から成る質問紙調査を行なった。

(二) 調査結果

本調査結果を述べるにあたって、ひとこと、ご注意を申したい。それは、本調査対象の大規模保育園の中には、降園時間などから推定すると、かなり幼稚園としての機能をもっているところもあるところから、以上に述べる結果が、保育効果として子どもにどの程度にまた、どのように影響していくかについては明らかにすることはできない点である。

イ、乳幼児の環境としての保育所

・小規模保育所に比較すると大規模保育所では、一歳児及び二歳児の入所率が高い。このことから、長時間保育になる体制があることが推定される。

・小規模保育所では、新任の保母が入った場合に、在園している園児全部の顔を覚えるのに一カ月以内である園が多いが、大規模保育所においては、全園児の顔を覚えられないと

する園が多い。この結果から、もしも担任保育が不在の場合、前者においては、ひとりひとりの個性に応じた保育が行なえる体制にあるのに対して、後者では、安全管理上の処置には応ずることができるとしても、ひとりひとりの個性に応じた保育が行なわれるかは疑問である。職員の仕事の分担当が臨機応変にできる余裕があることは、大規模保育所の利点の一つとしてあげられているが、子どもに直接かかわる保育に関しては例外として考えられる。

・小規模保育所では、保育室は一階だけをあてているところが多いのに対して、大規模保育所では、二階以上を使用している園が多い。このような建物の条件は、後者の場合、園児の行動範囲が規制されやすく、また、保育の承認や許可を求めて行動しなければならぬ場合が生じやすくなる。

・小規模保育所では、園庭はいつでも子どもや保育が必要とするときに使用できるように開放されているが、大規模保育所の園庭の使用は、時間をきめる、区分けをするなど、条件つきで使用している場合が多く、異年齢の子どもとの関係の発展は制限を受けることが多い。

ロ、保育の子どもの掌握、保育と子どもの接触

・園庭における自由遊びの際、大規模保育所では、「何とか掌握している」状態にある場合が多い。

・保育一人当りの受持ち人数は、三歳未満児及び三歳児の場合では、小規模保育所も大規模保育所も、その人数は、いずれも基準内で、両者の間に差は認められないが、四歳・五歳児では、いずれも基準内にあるが、前者二一・七人、後者二六・八人と、やや後者の受け持ち数が多い。

・担任でない保育と子どものかかわりを持つ機会、小規模保育所では、子どもの年齢にかかわらず、担任以外の保育とのかかわりが多いが、大規模保育所では、三歳未満児六四％、三歳以上の幼児四四％に担任以外の保育はかかわっていない。なお、三歳以上の幼児は、子どもの方から積極的に保育とのかかわりを求めて出向くため、三歳未満児に比べるとその比率が低下しているものと考えられる。

ハ、子どもと子どもの接触

全園児間の交流は、小規模保育所では、いずれの組の子どもとも自由に交流している所が八五％、同一年齢の組の子どもとの交流の多い所が一五％であるに対して、大規模保育所では、二七％と七三％となり、同一年齢の子どもたちとの

交流の率が高い。

異年齢の子どもの交流は、二歳児・三歳児・四歳児においては、小規模保育所の方が大規模保育所よりも有意な差をもって高い比率を示しているが、一歳児、五歳児では両者の間に有意差は認められない。

友だちと遊べない子どもの存在については、三歳児においては両規模保育所の間に有意な差があり、小規模保育所の方が友だちと遊べる子どもが多いが、四歳・五歳児では、この傾向は認められない。

以上、主として保育者との交渉及び子ども間の交渉の部分について、その結果を紹介したが、「大規模」という物理的環境条件から生ずる保母の精神的ゆとりの無さ、緊張が、子どもの活動や対人関係の制限、情緒の不安定、個人の特徴を活かした発達援助の稀薄さなどの問題を生じる可能性があるのではないかと推定する。

(大妻女子大学)

本研究は、平井信義を主任とし、市橋香寿子、比田井真、高橋種昭、星美智子、湯川礼子、加藤照子、本吉圓子、鶴田一女、清水恵子による協同研究である。



歴史人口学からみた生と死 二



鬼頭 宏

三、平均余命

(一)

ある年齢に達した人があと何年生存できるかを示す平均年数を平均余命という。とくに出生時（零歳）平均余命を平均寿命ともいい、人々の一生を、長さにおいても生活水準においても、端的、総合的に物語る数値である。

最新の一九七九年簡易生命表では、日本人の出生時平均余命は男七三・四六年、女七八・八九年となっている。男女ともスウェーデンと一、二位を競い、わが国は世界の中で最も長寿の国のひとつになっている。聖書（創生記第六章）は、ヤハウェ神は人間の寿命を百二十歳に定めたと書いている。事実、ヒトの寿命の上限はそれに近いということであるから、日本人の寿命はまだまだ延びる可能性をもっているのだろう。

日本人の過去の寿命はどうだったろうか。「人生僅か五十年」とは人生の短かいことの譬えであるが、出生時平均余命が五十を

超えたのはわずか三十年前のことである。一九五〇年に公表された第八回生命表（一九四七年調査）で、男五〇・〇六年、女五三・九八年と、男女とも初めて五十代に乗った。第一回生命表（一八九一―一八年調査、松浦公一による改作値）では、男三七・一年、女三九・四年でしかなかった（松浦・一九五八）。したがって百年足らずの間に、日本人の一生はなんと二倍の長さになったわけで、人口史上、他に例をみない高成長ぶりだった。

(11)

江戸時代に遡って全国規模の生命表を得ることはできないが、宗門改帳や寺院の過去帳を利用すれば、村や町単位の小集団の平均余命を知ることができる。表1に示したものがそれで、いずれも各期間の死亡コーホート、あるいは出生コーホート（同じ期間に死亡または生まれた人口集団）にかんして、宗門改帳から得られた年齢別死亡数をもとに年齢別死亡率、生存率を求めて算出された。宗門改帳には数え年二歳から登録されるのが普通なので、この数値は数え年二歳時の平均余命である（満年齢で言えばほぼ〇・五歳にあたる）。

出生時平均余命を求めるには、何らかの方法で数え年一歳時の乳児死亡を補正して推計しなくてはならない。より厳密な方法と

してはモデル生命表の適用による方法と経験的な曲線あてはめによる方法がある。表中、藤戸村と西方村の平均余命は前者の方法で得られており、例えば藤戸村の出生時平均余命は男四一・一年、女四四・九年と七年ほど短くなってしまう。曲線あてはめによる推計としては信濃国虎岩村の例がある（小林・一九五六）。ここでは一八一―五年の死亡コーホートから得られた出生時余命は、男三六・八年、女三六・五年で満一歳の余命より七―十年も短い。

簡便な方法として乳児死亡率を仮定して出生時余命を推計することもできる。数え年一歳の死亡率を、宗門改帳にてこない真の出生数の一〇%および二〇%と仮定しよう。すると、例えば湯舟沢村（一六七五―一七四〇年）の男で三四・三および三〇・一、同村（一七四一―一九六六）の男で三九・四および三五・〇が出生時平均余命である。ここでも二歳の余命より三―八年は短いことがわかる。

表1にもどろう。横内村、湯舟沢村、飯沼村をみると、十七世紀末以後幕末までの二世紀間に、平均余命は相当大きな伸びをみせている。おそらく七年以上になるだろう。出生時平均余命に換算すると、十七世紀には二十代後半ないし三十歳そこそこだったものが、十八世紀には三十代なかば、そして十九世紀には三十代

表1 江戸時代の平均余命（数え年2歳時）

地域（国）	年代	男	女	出所
横内村（信濃）	1671-1775	30.6	31.7	}（速水、1973）
	1671-1725*	36.8	29.0	
	1726-1775*	42.7	44.0	
湯舟沢村（信濃）	1675-1740	37.1	37.6	}（鬼頭、1974）
	1741-1796	43.2	42.0	
飯沼村（美濃）	1711-1781*	41.8	39.7	}（速水、1970）
	1712-1750	37.4	37.4	
	1751-1800	45.6	43.8	
	1826-1867	44.4	44.9	
浅草中村（美濃）	1717-1830	46.1	50.8	（Smith、1977）
西條村（美濃）	1773-1800*	34.6	34.4	（速水、1973）
西方村（三河）	1782-1796**	44.0	59.2	}（Hanley & Yamamura, 1977）
藤戸村（備中）	1800-1810** 1825-1830	48.8	51.5	
神戸新田（尾張）	1838-1869	32.0	30.0	（速水、1967）
尾・鷺組（紀伊）	1868・1869	38.5	35.5	（速水、1969）
高山貳之町（飛驒）	1773-1870	37.9	36.2	}（佐々木、1969）
	1806-1810	39.2	39.6	
	1811-1815	49.5	42.8	
	1831-1835	43.1	41.7	
	1836-1840	38.8	39.8	
	1841-1845	37.1	32.9	

* 出生コーホート（無印は死亡コーホート）

** 出生コーホート、Coal-Demenyモデル生命表により補正。

後半になって明治中期の水準につながったものと思われる。

表1からは平均余命の地域差が大きかったこともわかる。新田村落である神戸新田、漁村を含む尾鷲組十二ヶ村は、同期の他の地域より短命である。飛驒の一寺院の過去帳から得られた、十八世紀末から十九世紀前半にかけての平均死亡年齢も三十二歳程度だったから、このような村も例外ではなかったのかも知れない。母集団の規模が小さいこと、年齢構成の相違が調整（標準化）されていないこと、また年代のとり方が一定でないことなど統計上の原因もあるだろう。しかしそれだけではなく、現代に比べて江戸時代には、人口集団を取巻く自然的、社会的な相違が直接、平均余命に影響を及ぼして、地域差を際立たせていたと考えられる。

高山武之町はこの表1における、唯一の都市の例である。幕末一世紀間の平均余命（男三七・九年、女三六・二年）は極端に短いとは言えないが、条件の良い農村とは七、八年の開きがある。

高山では出生地別の余命が計算されていて、市内出生人口については男三六・三年、女三四・五年、外部（農村）からの移入人口については男三九・九年、女三八・六年となっている。明らかに移入人口の余命の方が長く、その差は三、四年に達している。このことから江戸時代の都市の平均余命は、一般に農村のそれよりも短かったと言えよう。

階層間ないし身分間の格差はまだ十分に研究されていないが、出産率などに明瞭な相違が認められているので、平均余命についても当然、同様のことが考えられる。武士階級については、「寛政重修諸家譜」に基いて計算された旗本の平均死亡年齢を紹介しよう（ヤママラ・一九七六）。旗本を出生年代別に分けると、一五六一―一九〇年四二・三歳、一五九一―一六二〇年四七・八歳、一六二一―一五〇年五二・八歳、一六五一―一八〇年五一・七歳、一六八一―一七一〇年五一・三歳であった。十六世紀に生まれた者と十七世紀に生まれた者では十歳程度の開きがあり、この間に旗本の平均余命は着実に延びることがわかる。しかし、江戸時代後半にどうなったか知ることができないのは残念だが、おそらく頭打ちだったのではなからうか。

また死亡年不明の者が一割前後あるので、これをすべて幼児死亡とみなすと、死亡年齢は五歳程度は割引かなければならなくなる。同時代の庶民人口よりはるかに長命だったろうが、余命の延びは十七世紀にとまり、後れて余命を延ばしてきた庶民人口との差は十八世紀以降、縮まる方向にあったと考えられる。

五代將軍綱吉に側用人として仕えた柳沢吉保家は、明治に至るまで七代にわたって一二〇人の子孫を出したが、その平均死亡年齢は男二二・〇歳、女一五・三歳でしかなかったという、信じら

れないような調査結果もある（松田・一九七八）。大名と言えども長命とはかぎらないという例である。

(三)

全国人口が停滞していた陰で、中央日本の農村の平均余命は最大限五〇％近くも伸延したと考えられるのだが、その原因は何にあるのだろうか。

明治以後の余命の延びが医療と医薬の進歩に多くを負っているのに対して、江戸時代の場合、通俗的衛生知識の普及、家庭用置き薬、漢方ならびに蘭方医の役割などは無視できないけれど、幕末に種痘が実践されるまでは流行病に対する有効な予防法や治療法が役立っていたとは考えられない。

それよりも、平凡で日常的な生活水準の向上があったことこそ重要でなかったらうか。江戸時代は、現代生活における日本の伝統が庶民に普及し、さらに向上した時代だった。

農民住居における掘立屋から礎石屋への転換、畳の敷きつめの普及はより快適な住環境をもたらした。近世以前に農業労働の底辺を支えていた下人・被官たちの地位向上もあった。かれらは木屋の土間の片隅や台所、馬屋で就寝していたのである。

衣料の面では木綿の普及があった。棉が三河で栽培されるよう

になったのは十六世紀初めで、十七世紀のあいだに東海、近畿、瀬戸内海沿岸地方で商品作物として重要な座を占めるようになった。その結果、誰もが木綿の衣服を着ることができるようになり、庶民衣料の中心は麻から木綿へ代わった。この移り変わりをもたらした生活の変化を、柳田国男は『木綿以前の事』で活写している。健康の面でも、丈夫で頻繁な洗濯に耐え、保温や吸湿性に富む木綿は、清潔と快適な生活をもたらしてくれた。

近世にはいつてから、精力的にすすめられた新田開発と集約的農業の成立によって、農業生産は拡大した。食生活も当然向上したと考えられる。十六世紀に、一日二食制から朝昼夕の三食制が一般化したほか、食品の種類が増加や質の向上がみられたからである。流通の発展も寄与したであろう。和食文化の成立は、庶民のすべてが米を常食とすることができたわけではないとしても、豊かな食糧余剰の成立を物語っている。

もっとも一人当たり食糧摂取量がどの程度かということになるとわからない事が多い。茶の湯の懐石料理の献立から、江戸時代の一人一日当たり摂取熱量を一四〇〇〜一七〇〇カロリーとする推計がある（堀津・沢田一九七八）。この水準は現代日本人の所要熱量はもとより、最貧諸国のそれをも下回る。江戸時代庶民の身長は現代より十センチ・メートル以上低く、慢性栄養失調の状態に

あったと言われる（立川、一九七九）。しかし同じ手法で推計された室町時代後半の摂取熱量よりは多いので、労働をより多く投下する農業の成立も考慮すると、一般に栄養水準は上昇したことが窺われる。

衣食住に限らず、入浴、育児法など幅広い生活の諸領域で、よりよく生きようと志向する態度が江戸時代に生まれたと言えないだろうか。

(四)

延びたといっても江戸時代の人々の一生は現代の半分でしかなかった。違いは長さだけではない。地域差や身分・階層による格差も大きかった。男女間にも、年齢別死亡率の様相にも現代との相違が大きい。

湯舟沢村の年齢別平均余命と生存数曲線を見てみよう（表2、図1）。最も印象的なことは生存数が二歳から六歳に大きく減少しているのに対し、平均余命の方は大幅に延びていることである。ここから、平均余命の長短が特に乳幼児死亡の多少に強く影響を受けていることがわかるだろう。またI期とII期の比較から六歳以後の余命にあまり差がないことも重要である。平均余命が短いということは、すべての人々が短命であることを必ずしも意

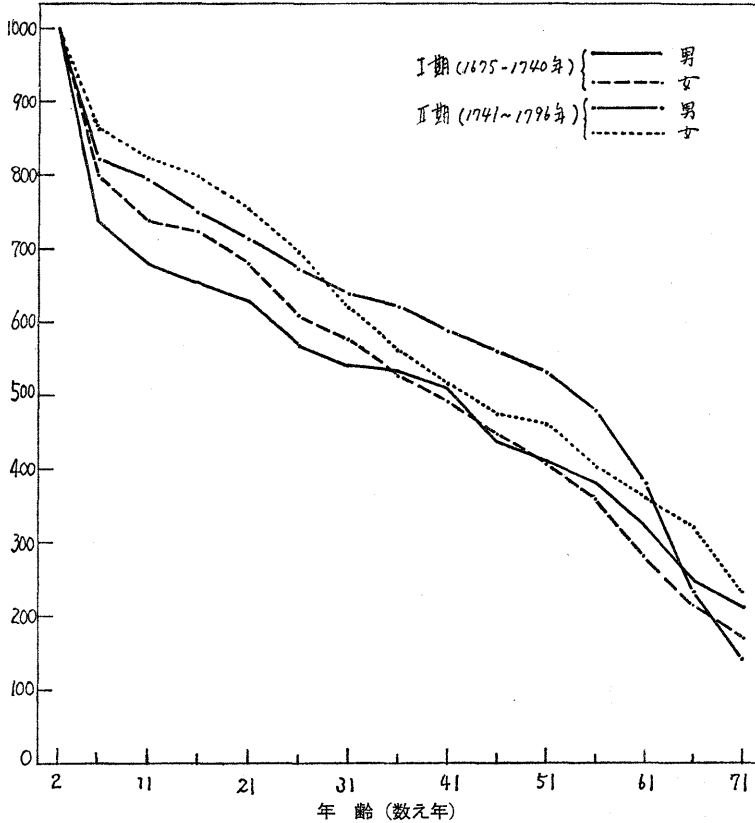
表2 年齢別平均余命（湯舟沢村）

年 齢	I期 (1675~1740)		II期 (1741~1796)	
	男子	女子	男子	女子
2	37.1	37.6	43.2	42.0
3	39.6	39.7	45.2	43.7
4	44.3	42.2	47.3	43.9
5	46.0	42.8	47.6	44.8
6	45.8	42.6	48.2	44.6
11	44.1	41.0	45.1	41.7
21	37.7	34.1	39.5	34.8
31	33.1	29.3	33.4	31.3
41	24.7	23.5	25.9	26.6
51	19.8	17.4	18.1	19.5
61	13.6	12.5	13.0	13.5

注 5歳までは各歳ごとに、6歳以上は5歳階級ごとに算出して抄出した

図 1 生存数曲線 (信濃・湯舟沢村)

生存数 (2歳=1000)



味しない。死亡率の高い、危険な時期を無事に過ぎると、平均余命はかなり長くなるのである。このことはさきに推計したように、出生時余命と二歳時余命の大きな開きにも示されていた。

五歳以下の死亡率が高かったために、江戸時代の最長平均余命は六歳以後にあらわれた。例えば信州横内村（一七二六—一七六六）の最長余命は、男が八および九歳の五〇・一年、女が六歳の四九・三年であったから、その年齢に達すれば六十歳頃まで生きることが約束されたわけである。

きわめて高い乳幼児死亡率は前工業化社会の人口の特徴である。懐妊書上帳という妊婦の調査記録から筆者が計算したところ、文化・文政期の東北南部の一農村では、出生千に対し一八〇に相当する乳児死亡があった（鬼頭・一九七六）。飛騨大野郡の寺院過去帳によると、幕末

の乳児死亡率は三〇〇パー・ミルにも達していた(須田・一九七二)。

五歳以下の幼児死亡については宗門改帳から知ることができ、それによると十七世紀末から十八世紀にかけては、二歳で登録された幼児のうち二〇〜三〇%は六歳までに死亡している。このような状況では、出生児の半分は十歳まで生存できないことになってしまふ。

仮に五歳以下の死亡率を半減させると、二歳の余命は少くとも五歳は延びることが計算から導かれるから、江戸時代の平均余命の延びの大部分が低年齢層における死亡率の改善によってもたらされたとみてよいだろう。事実余命の延びが認められる地域ではどこでも、幼児死亡率に大幅な改善がみられた。その顕著な例として横内村をとりあげてみよう(速水・一九七三)。ここでは一六七一〜一七〇〇年に出生した男子の三五%が五歳以下で死亡したが、一七五一〜七五年では一六%、そして一七七六〜一八〇〇年では八%へと大きく低下したのである。

低年齢層の死亡率が高いことは庶民人口に限られない。最高の生活水準を享受したはずの將軍家の子どもたちも例外ではなかった。

十一代將軍家斉(一七八七〜一八三七)は十七人の正妻と側室

から、二人の流・死産のほか、五三人の子を得た。しかし成人した子は少ない。一五人(出生児の二八%)は一歳未満で死亡し、さらに一七人が一五歳未満で死亡したので、十五歳以上まで成長した子はわずか二人(四〇%)にすぎなかった。將軍家といえども幼ない子の命を守ることが、いかに困難だったかを物語っている。

当時、小児の命を多く奪った病気のうちでもっとも恐れられていたのは、痘瘡と麻疹だという(立川・一九七九)。それに「虫」とか「疳」と呼ばれていた、消化不良、自家中毒症、小児結核、小児脚気、夜驚症などからなるさまざまな小児病、赤痢、コレラ、腸チフスなどの「痢病」がこわい存在だった。

病気のほか、栄養条件や生活環境、育児習慣にも重大な問題があったはずである。とくに統計には現われない、隠れた死亡原因として人口制限の手段となっていた間引の風習を指摘しなければならぬだろう。

平均余命を検討して考えさせられる第二の点は、現代と異なっており、しばしば男の方が長生きだったことである。そうでなくても男女差は小さく、平均余命は接近していた。この現象も低開発諸国にも見られる、前工業化社会の特徴である。平均余命における女性上位は工業化の賜物だった。

その原因を解く鍵は生存数曲線（とくにⅡ期）に隠されている。十代まで女子の生存数曲線が男子より高いのは、女の幼児死亡率が低いからである。しかし二十歳を過ぎると傾斜を強めて、三十歳頃には男よりも生存数が少くなってしまう。男女の生存数曲線の乖離は四十代半ばまでひろがるが、その後縮少して再び逆転する。平均余命も四十一歳以後男を上回る。

いうまでもなく、これは二十代から四十代前半にかけて女子の死亡率が高まったことの結果である。そしてこの年代が、ちょうど出産年代にあたってのことから、妊娠から出産に至る期間の死亡が多かったことを推測させる。適切な医療と母体保護思想の欠如、そして不確かな避妊がもたらす墮胎の慣習が、出産を非常に危険なものとしていたのである。現代よりも出産回数のはるかに多い江戸時代には、それだけ女性は命を失う危険にさらされていた。女子の二十代から四十代の死亡率を男と同等の水準まで引き下げてみると、女子の平均余命はあと四、五年は長くなる計算である（湯舟沢村Ⅱ期の場合）。

(五)

平均余命の短かったことが、他の人口学的特徴とどのような関連をもっていたか、ここで触れておこう。

これまで見てきたように、非常に高い乳幼児死亡率が短命に結びついていた。高い死亡率をカバーして一社会の人口を維持するには、同様に高い出生率を必要とする。江戸時代後半の全国人口の普通出生率と普通死亡率は、おそらくともに三〇パー・ミルを越えて四〇パー・ミルに近かったことだろう。

これを個別家族のレベルで言えば、多くの子をもったことを意味する。出生児の半分は結婚年齢に到達するまでに夭折してしまうから、家を維持するためには、ゆとりを持って多目に子を生んでおかなければならなかった。二十歳前後で結婚し五十歳まで継続した夫婦は、ふつう五、六人の子を出産していた。

高出生率・高死亡率は、人口の年齢構成にも現代とは異なった様相をもたらした。年齢構成を示す図である人口ピラミッドは、低年齢層が大きくひろがる富士山型を呈する。都市と農村、人口の増加期と減少期では当然異なるが、人口移動の少ない農村では一般に、十五歳以下の年少人口は三〇%以上、十六・六十五歳の青壮年人口が六〇%以上、六十六歳以上の老年人口は数%どまりだった。

短命な社会は、多くの幼ない者たちの犠牲の上に成り立つ社会である。子どもはいともはかなく、危い存在であった。そこに、おそらく子どもに対する矛盾する感情と価値観が生まれる原因が

あった。子は宝として大切にされる反面、意志のないものとして命さえもおとなの側の都合にしたがって、与えられもし、奪われもした。

「七歳までは神のうち」という俚諺がある。生存の可能性が不確かであるうちは人間として承認しないことは、夭折を嘆き悲しむ感情を緩和する点でも、間引を行なうことによって残余の人々の生存を安全にする上でも、ある種の合理性を有している。発達心理学からの解釈とは別に、このようにその背景の人口的な説明が成立ちうる。柳田国男は「元服前の人間が、一つの物の生命となつて行く一つの階段がある」として、もっとも重要なものが数え年七歳であると述べている(柳田・一九六九)。七歳という年齢は、平均すると満五歳半で迎えるわけで、最も死亡する危険の多い、人生の最初の五年を過ぎた段階である。そのような状況だったからこそ、子の発達段階にもなう通過儀礼の重々しい意味が理解されるのである。その歳までの生存と成長が祝われるとともに、儀式をくぐることによって人間としての存在を共同体に承認されるという二重の意味が、そこにあつたのである。

(上智大学)

〔参考文献〕

Hanley, S.B. and Yamaura, K. 1977 *Economic and Demographic Change in Preindustrial Japan, 1600-1868*, Princeton University Press.

速水融 一九六七 「近世後期尾張一農村の人口統計続篇」『三田学会雑誌』六〇巻一〇号。

速水融 一九六九 「紀州尾鷲組の人口趨勢——増減書上帳の検討を通じて——」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十三年度。

速水融 一九七一 「東濃一山村の人口統計——恵那郡飯沼村正徳二年——慶応四年——」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十五年度。

速水融 一九七三 『近世農村の歴史人口学的研究』東洋経済新報社。

速水融 一九七三 「濃州西条村の人口資料——安永二年——明治二年——」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十七年度。

堀津圭佑・沢田満喜 一九七八 『日本人の生存年数に関する研究』秋山書店。

鬼頭宏 一九七四 「木曾湯舟沢村の人口統計——一六七五—一七九六年」『三田学会雑誌』六七巻五号。

鬼頭宏 一九七六 「徳川時代農村の乳児死亡——懐妊書上帳の統計的研究——」『三田学会雑誌』六九卷八号。

小林和正 一九五六 「江戸時代農村住民の生命表」『人口問題研究』六五号。

前川久太郎 一九七六 「酒湯記録より見た痘瘡・麻疹・水痘の大奥への伝播」『日本医史学研究』二二卷二号。

松田武 一九七八 「一大名家の系図過去帳よりの統計的観察」『医学史研究』四九号。

松浦公一 一九五八 「日本人の国調前生命表（統計局第一―三回）の改作」『医学研究』二八卷七号。

佐々木陽一郎 一九六九 「飛騨国高山の人口研究——人口推移と自然的要因——」『社会経済史学会編『経済史における人口』慶応通信。

佐々木陽一郎 一九七七 「江戸時代都市人口維持能力について」『社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めて——その社会経済史的接近——』東洋経済新報社。

Smith, T.C. 1977 *Nakahara, Family Farming and Population in a Japanese Village, 1717-1830*, Stanford University Press.

須田圭三 一九七三 『飛騨O寺院過去帳の研究』私家版。

立川昭二 一九七九 『近世病草紙』平凡社。

ヤマムラ・コウゾウ 一九七六 『日本経済史の新しい方法』ミネルヴァ書房。

柳田国男 一九六九 「小児生存権の歴史」『定本柳田国男集』第一五卷 筑摩書房。



芸の世界からとどけられた

鳳の声・鶴の声

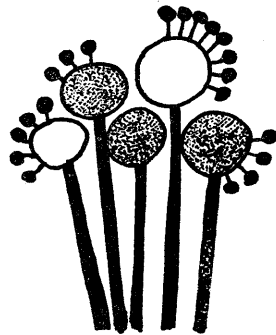
これは、昨年のみどり会夏季研修会シンポジウムより、竹田人形座、竹田扇之助さんのお話をまとめたものです。

竹田さんの人形劇の鮮やかな風情というのには非常に大勢の方がごらんになつていてと思います。今日はその生のお声に触れながら、竹田さんの人形劇というのがなんなのか、人形劇に託されているものが一体なんなのかということを考えてみたいと思います。

竹田扇之助

幼児体験としての人形

私、もう人形しか能がないんですね。人形に触れているか……。この間、NHKさんの取材で、生まれました伊那と一緒に参ったんです。母にNHKの方がいろいろインタビューしまして、初めていろんな話を聞いたんですが、とにかくちっちゃい時から人形ばかり作っていた。親父さんが、男のくせに人形なんか作るっていうんで、川の中に捨ててしまうと、押入れの中で作っ



た。押入れの中で作っているのを見つかつて、近頃は家にいないから人形を作っていないだろうと思つたら、屋根の上で作つていた。自分の事でありながら、本当に母が話すのを聞いてびっくりしちゃった。人形以外のことほとんど何もしてなかったらしいですね。

そうして大きくなってきますと、とても芝居が好きでした。私の子供の頃っていうのは、学校が許可してくれない。芸能というのを見ますと必ずわかつてしまつて、翌日廊下に半日ぐらい立たされた。でも、そんなことにめげずに一生懸命お芝居見たんですね。私の家は食べ物商売をやつておりましたから芸者衆もずい分出入りしておりました。町に一〇〇人からの芸者衆がおりまして、ちゃんと義太夫のいわゆるチョボ、歌舞伎に出てまいります。浄瑠璃を語る太夫さんと三味線ですね。こんな方もちゃんと住んでいたんです。子供の頃、シーズンになりますと、東京からお師匠さんがみえて歌舞伎の有名な狂言を毎年毎年上演しました。学校から帰りますと、カバンをボンと放り込んでもう見番へ行つてずうっと芸者衆の稽古がはねるまで見てたんですね。

そうしている内に、作るだけで安堵していた人形をなんとか動かしてみたいという欲が出てきたんですね。伊那の山の中ですからそんなもの指導してくれる人もいませんし、そんな本もござい

ません。戦争中に大政翼賛会で出しました薄っぺらな本が見つかりまして、これで片手使いの人形を一生懸命糊も紙もない時代でしたけれど作つてやっています。背負子に背負つては婦人会に行つて慰問したり、隣り組を廻つて見せたり。そんな時に終戦を迎えまして、九代目結城孫三郎という糸あやつり中興の祖といわれる名人が、私たちの町に参りました。それを見た途端に、一生を賭けるのはこれだと直観的に思つちやっただんですね。

家を勸当されて焼野原の東京へ出てまいりました。幸福なことに、当時は、日本の古典芸能をなさる名人の方々が、焼野原の、本当に小さな小屋でいろんなものを見せておりました。そうして四十近くまで、本当に日本のそういったものの中だけで頑なに私、生きてきたんです。ところが、なんか変な夢が出てきて、日本の糸あやつり一生懸命やっているんだから、世界中の人形劇がどうやっているのか見てみたいなと思うようになりました。

丁度、世界一周八十日間なんていう映画が封切られた頃で、三月月にわたりまして、世界の人形劇場を見て参りました。そこでできたお友達がいると引つ張り出してくれて、外国の公演などができるようになりました。

初めての外国公演

(外国の子供に浄瑠璃を見せる)

初めて外国からお座敷がかかってまいりましたのが、西ドイツのポツハムにある国立人形研究所で、初回の外国旅行の時に訪問したところです。大人の方が見られるというものですから私、浄瑠璃のお芝居ばかりを持っていったんです。ところが飛行機の都合で一日早く着いてしまった。一日休ませておくのはもったいないというので、フェスティバルの最初の日に公演をしてくれという話になったんですが、幕が開く前にそこから見てびっくりしたんです。場内のお客さんは大人なんてどこにもいやしない。幼稚園から中学校ぐらいの子でいっぱいなんです。だってそうでしょう、日本でだって浄瑠璃のお芝居を私たちがいたしますと、やっていてつらくなってくるんです。もうお客さんがあきてきたな、つまんなそうな顔をしているなっていうのがツウーッと胸にきてしまうんです。外国の子にこのお芝居を見せる幕を開けて一体どうなるのかと思って……。初めて外国に呼んでもらって、これではよぼってしまったりどんなことになるんだらうと思ひまして、本当に震えがくるくらいでした。でも仕方がないですから幕を開けて又びっくりしたんです。ちゃんとツボになると手がくるんで

す。

御存知でしょうけど、日本の古いお芝居というのは置歌というのがみんなあります。登場してくる前に、その情景を歌う浄瑠璃とか長唄だとか、清元だとか、下座唄だとか、いろいろあるわけです。それをまるで聴きながら、いい気持ちになって出ていかれるんです。お客さんが本当にいい気持ちになってるのが、こっちに伝わってくるんです。なんだか初めこわくて震えたのが、どんどんうれしくなってきた、お客さんと私たち、もう胸が一つになっちゃったみたいな気持ち。お客さんが子供だとか、大人だとか忘れてしまったんですね。

終わりますと、何度も何度もアンコールしてくれるんです。私はもう横文字なんてのは一切読めませんし、もちろんしゃべれませんが、子供たちも日本語はできませんけれども、お互いに、今の日本人どうして話すよりか、もっと素晴らしいものを、子供たちがホッペから、目から、全体で舞台に投げかけてくれる。名残り惜しそうにみんな振り返りながら帰っていききました。

あんまりすごいものですから、私、このポツハムの子というのは、きつと特別な、日本でいうと演劇教育をうけた子だらうと思っしまいました。

ところが、それからボンを中心に十二の町をずうつと南から北

まで公演を一ヶ月間しました。全部、昼の部は子供で、すごいんです。早稲田を出て、絵の勉強にドイツに来てという学生さんが通訳でついてくれたんですが、「竹田さんの舞台見ているよるか、客席見ている方が楽しい」というんですね。ドイツ人がこんなに興奮して、子供がちゃんと見るといふのは本当に不思議なくらいだというんです。

終わってから研究所の方に聞いたんです。大人でも浄瑠璃のお芝居なんて、じいっと見ていない。どうしてああいう風になっちゃうと、こっちが手を打ってほしいと思うところで、手がくるんでしようね、心が踊ってくるんでしようねと言ったら、ドイツの場合、ちゃんと子供はここまでという線のものと、こういうものをわかってほしいなというものを、わかろうと、わかるまいと、ちゃんと小さいうちからどんどん聴かせたり見せたりしている。あなたがここで手を打ってほしいなんてことは子供たちはきつとわからずに、肌で、耳で、目で感じて、手を打ってくるんでしようねと言ったんです。

日本の糸あやつり

私は糸あやつりの人形をやってまいりました。新しい人形劇を

される方に、私、戦後からずいぶん言われました。日本の糸あやつりは古いと、じゃ、古いという方たちはどこから勉強したのかわかって、私、思ったんです。ドイツだとか、ソビエトだとか、おそらくそういうところから入ってきたんだろうと思います。明治以後の演劇理論というものは、

ところがそのドイツに行ったら、日本の糸あやつりは音楽だっているんです。なぜ音楽ですかと言ったら、糸あやつりが持っている、ピクッ、ピクッと上へ引つ張るあの欠点、ちゃんと美しく、リズムに整理されていると言わね。一番日本で古い古いと言われる糸あやつりが、そう言う人達が勉強してきた本家本元へ行くと、素晴らしいと……。私、そのあたりから、非常にいろいろの疑問を持つようになりました。

考えてみたら、先ほどお話ししたNHKさんの取材旅行で、伊那谷をずうっと廻りまして、山の中に残っている歌舞伎だとか、お客さんについている野舞台だとか、いろいろなものを見たんですが、子供の頃見た印象というのは強烈に残っているんです。

飯田という町には、日本の上方、それから東京の千両役者がみんな来て、舞台上だったという、とても芸能にすぐれたところがあるんです。私は三歳かそこらで見たんですが、今考えると、あれ、車曳きなんです。そんな事が強烈に印象に残っているわけ

す。

日本に今ある、子供はこれだけしかわからない、なんでも教育と理論で押しまくっていくものも、私、結構だと思います。

でも、日本人が何百年もかかって行なって、残してくれた伝統芸能が、明治百年でガサガサくずれていった中でも残った、本当に貴重な糸あやつりです。それを私が幸か不幸か、人形気違いのために、一生懸命父から譲り受けて、現在までやっているわけです。これをひとつ生かして、なんとか昔から続いている演出の技法だとか、あやつる技法だとかをうまく活しながら、お母さんも子供もわかるようなお芝居ができないものかなと、たびたびの外国公演を続けたり、幼稚園の先生方と向こうの人形劇と教育とが結ばれている現場を歩いたりしたことなどから、考えつくようになりました。

そして、明治百年に、「明治」という糸あやつりの長編映画をつくった時に建てた、糸あやつり専門の映画スタジオを使って、昭和四十八年から徐々に始めて、五十年から十五日間、三十回ずつの夏の公演をするようになりました。ある時は文楽の方たちに作曲をして演奏をしていただいたり、新作の浄瑠璃だとか、ミュージカルだとか、あらゆるものをずうっとやってきました。

そのようなとき、昨年、東京では二三区のうちで一番文化不

毛の地といわれている足立区が、日本で初めてですけれど、公費を投じて、私どもが理想的に上演できる、また理想的にのらんだだけの劇場を造って下さったんです。今年で二年目の公演をその劇場でやっているわけですが、今まで私達が幼児の教育というものから学んだものとは全然別の形で御覧になっていたいております。

なんで子供にわかるものをしないんですかという方もあるんですが……。昨年はこけら落しで、日本の人形劇場ができたんだから西洋のものをやることはないっていうんで、三番叟で、ちゃんと古格に火打式から始めまして、「鶴の笛」という新作、「橋弁慶」と、「寿三題」というおめでたいものばかりやりました。

ところがお母さん達は、「あの初めに出た、三番叟ってお人形がかぶっている帽子は何なの？」と子どもに聞かれたって説明ができない。自分の国の芸能が全然説明できないっていうんですから、こんな不幸なことはないと思ひまして、途中から解説に出して、私お話を始めたんですけど……。

人形劇というものを、子供さんが幼い時に見た強烈な印象というものは、きつと一生を左右するくらいな、なにか大きな力があると思います。私がやっていることが少しでもいいなと思ひになつたら、教育とかなんとか、めんどろくさいことをおっしゃら

ずに、どうぞお子さんをお連れになってお見せいただきたいと思
います。日本人ですから、日本人が残してくれた芸能を子供のう
ちに見なかつたら、これはおかしなことになると思いますよ。

七年目の「マイ・フェア・レディ」

(自分で自分をコントロールできる力)

芝居ってというのは、何十回でも、何千回でも、何万回でも役者
は、初演の時と同じ感動を、どういう生理状態であろうと、どう
いう悲しみであろうと、舞台上で表現していかなくてはなりません
。絵描きさんだとか彫刻家は、パッとイメージがわいた時
に、夜中でもなんでも、ダッダッダッと描きなぐったり、つくり
あげて、作品を残せばいいんですけども、舞台上立つ商売という
のは大変なことだと思います。

うちでたいそう当たりました「雪ん子」の芝居なんかは、日本
中で何千回とやって、舞台の不備なところ、まっすぐ立てないよ
うな学校のぶち抜き教室、いろんなところでいたします。でもい
つも初演の時のようにふるえながらやらなくちゃいけないわけ
ですね。これは苦難なことです。でも、私の養父の竹田三之助の芝
居を見ておりますと、お客さんはその時によって変わりますが、
今日のお客はわからねえぞって一言そでで出ていきます

と、いつもやっているお芝居を、全く手を抜いて、ポンポコ、ポ
ンポコやるんですね。でもその手を抜いたのがいいんです。素晴
らしい。どうして一つの芝居がこんなに変わって、ちゃんとお客
をひきつけて見せるのかなと、いつでもそのことに酔いました。

ブロードウェイで「マイ・フェア・レディ」を初めて見ました
時のことです。当時すでに七年目をやっているというのに、エプ
ロン・ステージへずうっと出てくると、主役、もう六十すぎのお
婆さんですね、首のあたりシワだらけ。ところが初日みたいに目
はキラキラ輝いて、身体中からワーツとお客さんを包み込んでし
まう。ものすごい感動でした。なにが感動かというと、自分がと
ても苦しんでいることをこの人は、簡単ではないでしょうけれ
ど、ちゃんと七年間も、同じ芝居を毎日毎日やってくれていると
いう感動だったんです。

どんなにしても、これはこの役者さんに、楽屋口で待ってい
て、手でもどこでもいいからとにかくさわって、その御利益をい
ただこうと思っただけです。

これは「マイ・フェア・レディ」ばかりではないと思います。
いろいろなお芝居見ましたが、ほんとにみんな、今日、このお芝
居のために、私は生れてきたんだよというような顔をしてやって
いるんですね。日本でもそうです。父(養父)を一つ例にとりま

しても、父は、人形というものを教えてくれたわけではないんです。横に坐って見てただけ。でも、やっているのを見てたものを、おいやれよと、舞台で明日やらせてもらうというのは、もう何の抵抗もなくできました。でも見たことも、聞いたこともないお芝居でも、二、三分、こうでこうだよとボンボンと口だけで言うって舞台上げさせられちゃうんです。そして、聞こえよがしに、あそこが悪い、ここが悪いと言うんですね。

人形が楽屋につる下がっているのですが、勉強したいからと、他人が使っている人形にさわろうものなら大変です。人形が狂っちゃうと追いかけてぶんなぐられた。

朝起きれば掃除すること、雑巾がけすること、そんなことばかりやっていた。

でも今考えてみると、やっぱりそういうことが本当にどんな立場になっても、どんな身体の状態でも、精神状態でも、きちっと自分でコントロールして、踏み込ませて、ある程度の段階までは他人の身体でなく、自分の身体として、自分の頭で操作できる力を養ってくれたんだと思うんです。

羨

ロンドンでクリスマスからお正月にかけてずうっとお芝居をいろいろ見ていたことがありました。ロンドンで楽しいのは、その頃になりますと、ちゃんと大人が見る劇場で子供のものを何の手抜きもなく見せていて、ほんとうにうれしかったんです。コメディアン劇場ではコメディ、レビューをやる劇場ではレビュー、オペレッタ・コペント・ガーデンでも同じように子供にわかるものを毎日演っております。バレエでは、「シンデレラ」とか、「ジゼル」とか。

ある日、「白鳥の湖」の切符をようやく譲ってもらって探しあてた席が五階だか六階の一番上の、それも舞台のつけ根なんです。幕が開いたら、舞台がまるで三分の一しか見えない。その時に驚いたのは、小学生らしい男の子を三人ぐらい連れた若い夫婦、身なりで人を考えてはいけません、どう見ても生活の苦しい方でしたが、登山するみたいに五階まで上がってきて、そして始まる前にバレエの説明をきれいな言葉で、子供達に聞かせているのです。僕は英語はわからないけど、なんて美しい発音なんだろうなあって酔って聞いていましたよ。

お金のある子は、ちゃんと一階の真ん中で見ている。この程度の生活の人が、日本だったらこういうことにお金を使うかなと思いましたが、本当に背筋がゾクゾクとして悲しくなっています。

ました。

幼児教育の理論、理論ということも大切だと思いますけれども、もっと生活について、お芝居だとか、音楽だとか、そういうものがちゃんと……三度の食事をいたくと同じように大切なことなんだなと思いました。私たちが、毎回毎回、舞台上で新しい力を持つてできるようにしつけられたと同じように、理論でなくてしつけるということが、私は大変大切なことではないかと、人形を通じながら思っているんです。

日本人というのは、世界で一番お芝居が好きで国民だったと思います。人形芝居なども世界で一番沢山の種類を持っております。文楽にしても、糸あやつりにしても、世界中どこへいっても恥ない高度の技術を持っています。それなのに、明治以後、どうしたのか、その一番大切なものをどこかへ置き忘れちゃったんですね。やたらと難しい言葉でそれを考えちゃう。

私の郷里の伊那には、黒田人形という有名な無形文化財の舞台がお客さんの中にあります。一年に一回づつ、素人の方がその技芸を伝習してやっているんです。私が行った時には、阿波の鳴門をやっておりましたが、三、四歳の女の子にお母さんが一生懸命。鳴門の筋書きを聞かせてるんです。ああ伊那にはまだこのように、しつけるお母さんがいるんだなと、とてもうれしくなっ

た。えらいことを言わずに、さりとて空気を吸うみたいにしつてお母さんがいるんだなと、救われたような気がしました。

人形劇というのはゲートも言っていますように、子供の時に見、そしてあらゆる人生のいろいろのことを経てきて、また年をとって、人間の生活に失望して、再び人形劇の世界に帰ってくるということが言われますけど、そういう純粋な仕事をやっているだけに、私は身を美しくという「躰」の字をもう一度皆さんに考えていただいで、活用してくださればうれしいなと思います。

私の父の竹田三之助は、ゆかたなんかを着てゴロツと旅の宿なんかで横になっていても、美しいなあ、すがすがしいなあと思いました。六十過ぎたおじいちゃんがゆかたがけで、スツというだけでも、横から見てもすがすがしい、ちゃんとお金を払ってそういう姿を見てもいいなという気持がしました。美しいってものは、何も気取ってつくるものでもなんでもなくて、そのへんに、ゴロゴロしていなくちゃいけないもので、それをひとりで、子供達にも吸収させる立場に大人達がならなくてはいけないなあということ、今、子供達にお芝居を見て頂こうという立場に私がなりまして、いつでもそのことを考えています。

一生懸命というこ

私、ずっと小さい時から人形をつくって人形のプロになったわけですけども、一生懸命やっていると、なんにもなかったんです。楽しくて楽しくてしょうがない、やることが。今考えて、毎日やることが楽しかったです。一生懸命やっていると、自分は言うことではなくて、はたから決めることじゃないかと、私は思っております。

今の座員の人たちは、来ると一生懸命にやって、早く名前出して、売り出したいというのがまず先にくるみたいです。でも男と男、女と女じゃ子供はできませんし、ブランドーは、ねかせばねかすほどうまくなりませんでしょう。だからその時期を本当に心楽しく生活しているかどうかということが、一つの目的を持ってやっていることが、はたから見ると、一生懸命であるか、ないかの判定をする根拠になるんじゃないですか。

だから、一生懸命やるという言葉は自分で言っただけでいいと思いますね。本当に楽しく生きていたら、はたから見ると、眼の光も違ってくるし、顔色も違ってくる。おのずとそれが、子供にも伝わってくると思いますよ。

ブロードウェイの舞台というのは、みんな生活が結びついていて、ご存知でしょう、主役やっていたって、いつ倒れたってパースと出られるように横に同じ主役の格好をした代役が立っているわけですから。生活がかかっているわけですよ。見てると、何か身を切られるように厳しさが伝わってくる。

ロンドンのウェストエンドへ行くと、それがもう一つ乗り越えられて、そんなきびしいことを忘れさせて楽しませてくれる。こは考えなくちゃいけないところだと思っんですよ。ですから、敵しいんだ、一生懸命やっていると、旗振って見せると、子供にもそれが伝わって、離れてくるんじゃないでしょうか。一生懸命やって、厳しくやっていると、もう一まわり包んで子供に出せるようになるのがプロではないかと思っんです。

私はお客さんが楽しんで、トロンとしていふふうな舞台をつくりたいと、毎日毎日思っやっていますけれど、保育の専門家は同じことを教室でやるわけですね。

私、舞台へ出ますでしょう、すると、今日は何々さんが御招待で来られていますとか、自分の芸をすぐほめてくれる評論家なんかが見ておられるというと、自分の二の力を三にも五にも見せようなんて意識はしていませんけど、やっぱりそういう時に

粗相があるんです。糸がからんじやったり、道具が引っくり返ったり、普段では考えられないことが起きてくるわけです。私はこんなに偉そうなことを言っていたって、本当に忘れて舞台をやるということができなくていつでも泣けるんですけどね、舞台は作品みたいに何度も書き直したりできなくて、一発勝負ですから。

淡谷のり子さんと昔、百万円の宝クジが全国中継でラジオ放送されていた頃、アトラクションでよく一緒になったんですが、楽屋が一緒だったりすると、あの方はほんとに姐御ですから、パーッとほだかになっちゃって、オప్పパイ出しながら、「竹田さんねえねえ」なんて話し出すんですよ。「あたし、どうしてピアノのところに手をやって、ポーズつくっているか知ってる。」って言うから、「いえ、あれいい格好ですね、毎日見てもいいですよ。」って言うんですね。「声をひそめて」私は毎日毎日、うまく歌えるかしらってブルブルふるえがきて、間奏の間、立っていられないから、ある日突然ピアノのところによりかかったら、ふるえが止まって、お客さんにわからずに次の歌までもてるかなと思ってやったら、それがうまいくんで、それからずうっとやっているのよ、みんなはあれ、ポーズだと思ってるけどそうじゃないのよ」というんですね。

みんなつらいんですよ。だからお互い一生懸命、楽しくやりま

しょう。

美しいもの（に触れる）

私は伊那谷の両方のアルプスを見ながら育ったんですが、その頃の伊那谷はお蚕でとてもお金が入ったんです。大正時代ですね。もともと団十郎が流されたりしてしまして、芸能というものがしっかり地に根をおろしているわけです。飯田なんて町は、衣装屋さんやかつら屋さんがちゃんと成り立っていたんですよ、信州の山の中で。

私の家は、蚕を交配させて種をつくっている家で、新種をつくる仕事を、祖父のまた前からずうっとやっていたわけです。ですからお金がじゃかじゃか入るもので、蔵の中には美術品がいっぱい入っていた。そういうものが自然と眼に触れていたんですよ。

舞台に出るといふこともそうですけど、やっぱり僕たちは人形をつくらなくてはなりません。肌から触って、いい玉だとか、いい女の人の髪の毛触っていると、誰でもいい心もちですよ。理屈でなくって。やっぱりいい器だとか、美しいものに触れてるっていうことは、大変な力が貯えられていくわけです。そういうものが、僕の場合は人形という形で自然と噴き出してきたんですよ。

うね。そしてその力が、糸あやつりの技術を使って、「雪ん子」だとか、「鶴の笛」だとか、竹田人形座で皆さんにほめていただいている一連のそういうものを作り出すものになったんだと思うんです。

子供が生れたからといって、これは壊すから、これは大切なものだからと、どんどん押し入れの中や蔵の中に入れてしまったんじゃないだめだと思えますね。いつでも美しいもの、いいものが眼に触れるようにしておくということが、子供の無形の財産になるから、親の責任になるんじゃないでしょうか。

私、今、人形をやっていることを、どうしてかなあと振り返ると、いつでもそう思います。外国へ行つて、きれいな景色だとか、有名なところを見ても、ああ伊那谷はこれに負けないと誇りを持ちます。いろいろな芸能を、向こうの一流の舞台で見ても、ああ、おれは日本の糸あやつりをやっているしあわせだなあ、日本人としてしあわせだなあと思えますよね。

ですからやっぱり、お母さん方、先生方が本心に美しいものに子供さんがひとりでに触れるようにしておくことが一番大切なことなんじゃないでしょうか。

それから、私の家には中国の古い陶磁器が山とあったんです。季節によって部屋部屋にいろいろ飾り替えるわけですが、子供の

頃、両親がいない時に、こっそりと、おそろおそろ持つてみるんですよね。持つ掌の良さだとか、薄さだとか、重さだとか、質感だとかいうものが今、舞台装置にダメを出す時とか、演出なんかする時にすごく勉強になる。なんにも理屈じゃなかったんです。

先だって亡くなった、先代の三津五郎さんが、私に子供ができた時に、「お前さんね、日本の芸好きなんだから、NHKのライブラリーへ行つて、昔の名人の新内から、清元から、長唄から、義太夫から、みんなテープにとつてきて、子供がゆりかごの中に寝ているうちから、静かに静かに子守唄のかわりに流しなさいよ、日本人の完全な耳になるからってさんざん言われました。お嬢さんになつちやつてから聞かせようとか、義理でやってもだめですよ」って。

親の宿願を、なんてそんなやましいことを考えたらだめで、知らないうちに……。僕なんかそんなこと全然意識しなくて、しあわせなことに、そういうものが身についたんで、すごく感謝しています。

美しいってものは、モードであろうと、瀬戸物であろうと、なんでも変わらないですね。

(丁)

続・保育の中の小さなこと大切なこと ⑤ 守 永 英 子

年長組も、秋になると、過ぎていく一つ一つの行事が、幼稚園生活の終りを、しみじみと思わせる。

子どもたちにも、何かしら、そのような思いがあるのであろうか。秋も終る頃、T子が私のそばに寄ってきて、問いかけた。

「私たちが小学校へ行くとき、今、ひきだしに入れてあるノートや、クレヨンや、はさみは、おうちに持って帰るの？」

「そう、持って帰るのよ。」私は、少し感傷的な気分になって、答えた。が、次に続いたT子の言葉に、しみじみとした気持は、一瞬にして吹き飛んだ。

「池の組（年中組）が、大きい組にきて、私たちのノートがはいっているよ、邪魔だから？」

私は、驚いて、言葉に詰まった。何ということであろう。私の中には、こういう発想は、全くなかった。子どもの自由画帳は、その子どもの成長の姿として、又、思い出になるも

のとして、子どもの手許に残してあげたいものと思っていた。

しかし、T子の言うように、前の人のノートが、ひきだしに残っているのは、次の人が困る、というのも、一つの理屈ではある。

私は、白けた気持を押えて、できるだけ穏やかに答えた。

「あなたがかけた絵は、あなたの大事なものだから、おうちに持って帰るのよ。大きくなってから、小さいとき、こんな絵をかいたのかなあ」って、見られるでしょう。」

「ふうん」 T子の反応は、なるほどというように、素直であった。

私は、ほっと胸をなでおろした。が、それも、つかの間であった。

T子は、教卓に置いてあった、一冊の自由画帳に、目を止めた。

「このノートは誰の？」

「K子ちゃんのもの」

「どうして、ここに置いてあるの？」

「全部かいてしまったから、新しいのをちょうだいって」

「どうれ、見せて」

T子は、K子の自由画帳を、バラバラとめくり、まだかいていない、白いページを見つけた。

「まだ、かいてないところあるじゃない。早く、新しいノートをもらいたくて、ごまかそうと思ったんじゃない？」

驚きと、情なさが、一度に、私の胸の中にひろがった。私は、重い気持ちに堪えながら答えた。

「きっと、全部かいたって、思い違いしたのね。」

T子は、それ以上、そのことにこだわる様子もなく、子どもたちの遊びに、はいつて行った。

T子にとっては、何気ない、軽い会話といった調子であったが、受けとめた私にとっては、何とも、気の重くなる会話であった。

このクラスは、私の二十数年の経験の中で、最もけんかの多いクラスのように思える。特に、女の子たちの、激しい口

調の言い争いは、私の心を滅入らせた。そして、最近はいぶん穏やかになってきたと思われるもののその渦中に、T子がいることが、多かったのである。

そのことの意味を、この会話は、私に、新しい側面を見せて、気付かせてくれた。今まで、子どもたちのけんかの多くは、気持の表現のつたなさから、起ってくるものと思っていたし、事実、そこに、指導の焦点を置くことで、ずいぶん子ども同志の関係を、よくすることが出来たと思う。

しかし、T子の場合、それは、表現の問題ではなく、周囲の出来事の、見え方の問題である。性格が強く、口も達者なT子のまわりに、「Tちゃんに、いじめられた」という訴えの多かつたのも、なるほどどうなずける。

生後六年、どのような仕組で、このような見方が、作られてきたのであろうか。このような見方が、変るためには、何を手がかりに、どのように、働きかければよいのだろうか。卒業までの三か月間に、私に出来ることは、何であろうか。私は、すっかり頭をかかえてしまったのである。

保育とは、むずかしいものだと、改めて、しみじみ思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

思い出草・二



和田陽平

竹さん

雑草・雑木が好きなのは親譲りかも知れない。父や母は庭師が樹を剪定するのを好まなかった。

「余計な枝は自然に枯れるものだよ」

樹は伸びるに任せ、雑草も好きなのは抜かずに残した。

夏はホタルブクロ、ツユクサ、カヤツリグサが咲き、秋はヨ

メナ、ノジギク、ツリガネニンジンなどが庭を彩った。

庭の掃除には時々、土方の竹さんが来た。竹さんは穏やかな老人で、好みをよく弁えて、丁寧に草を抜き、冬は庭の小径に藁を敷いた。幼い私は、どういう訳か竹さんが好きで、竹さんが来ると一日中、そはに食っついて離れなかった。竹さんもまた、にこにこ話相手になって呉れた。私は母に、わざわざお弁当を作って貰い、庭の縁台に並んで仲よく食事をした。竹さんの大きな弁当の真ん中には、梅干が入っていた。

私達が一体、どんな話を交したのか。情ないことに全く思

い出せない。弁当の梅干なんかよりも、その時の話の、ほん
の一かけらでも思い出せたら、どんなにかいいのに。

ビネ・テストのなかの、文章の不合理的問題に、家か
ら公園までの道は下り坂ばかりです、公園から家までの帰り
道も下り坂ばかりです、というのがあつた。まことに人の一生
は天上界から俗界への下り坂ばかり。低俗な世界に沈淪して
いる現在の私には、遙か昔の高地の言葉は覚えていてはなら
ないものなのだろう。

アイスクリーム

夕涼み、一家揃つての伊勢佐木町の帰り道、どうか吉田橋
を渡りますようにと、心ひそかに念じていたのであつた。橋を渡
れば馬車道の、風月堂でアイスクリームを飲むことになるか
らである。ピカピカ光る真鍮の扇風機が首を振り、濃緑に白
い筋の模様の入った大理石のテーブルで食べるアイスクリー
ムを、当時の私は、世の中にこんな旨いものは二つとない
と、固く信じていた。

その頃のアイスクリームは、今のそれとは全く異質のもの
であつた。この頃、私は百科辞典で、たまたまアイスクリー

ムの項目を読み、一かたならず仰天し、かつ、今のものが昔
のそれと異質である所以を了解した。現在の工業生産のアイ
スクリームの原料のなかに、何とアルギン酸とアラビア護膜
！ 道理で矢鱈にべたべたする筈である。私のアイスクリー
ムは遠い昔に姿を消した。

秋の一日、母は私を連れて、東京行きの汽車を待つ間、横
浜ステーションの食堂に入った。当時の横浜ステーションは、今
の桜木町駅の所にあつて、それは汽笛一声新橋駅——汐留に
あつた——と全く同型の、中央の玄関を挟んだ左右相称の石
造二階建て、まことに風格のある建物であつた。駅前の広場
には、日本最古の高雅な西洋式噴水があり、広場を隔てた大
岡川の河べりには、西洋料理店川村屋があつた。駅の向つて
左側には、機関車を回れ右させる、かままわしがあり、円い
台に乗せた機関車を、二人の職員が、よいしょよいしょと回
すのを、私はいつも、柵の柱の間に首を突っ込んで、飽きず
に眺めるのであつた。

さて、秋の一日、母は私を連れて、駅の食堂に入り、何が
欲しいの、と私に聞いた。欲しいのは世界一の珍味にきまっ
てる。

「アイスクリーム」

所が当時は、アイスクリームは夏の盛りしかなかつた。しよげ返つた私に、ボーイが機転をきかせて、

「坊っちゃん、アイスクリームはございませんが、おいしいシュークリームは如何ですか」

私は忽ちそれに乗せられて、

「うん。それがいい。シュークリーム」

私は大喜びでシュークリームを食べた。

悼心賦

悼心などという言葉はないかも知れない。

.....

鬱々と屈託した日々を送つた学生の頃、毎夜、床のなかで読むグリム童話に、いささかの心の安らぎを得たことがあつた。金田鬼一訳の岩波文庫五冊を読み終えた日に、何気なく跋文を読み、その末尾に到つて私は思いもよらず、ひとかたならぬ衝撃を受け、涙をとどめることが出来なかつた。

金田氏よ。ここに無断で引用致しますことを、どうぞ御ゆるし下さい。私は、どうしても、皆さんに伝え度いのです。

それは、次のようなものであつた。

幼くして逝きたる二人の愛児

九美ちゃんと九一の霊に

この書をささぐ

この世にては相見ざりし姉と弟、今はひとつの墓のうちに相擁してねむる。暮暁の青木の実、紅累累たり。

櫻路は姉にささげよおとほとけ

父 鬼一

*

父を呼ぶこえもきこえず母を呼ぶこえも

きこえず秋の日暮るる

母 たか

物の本を読んで涙を流したのは、あとにもさきにも、この時だけであつた。

.....

私の弟は小学校一年の、夏休みの終りの八月三十一日に発病し、翌る一日の夜に、あつけなく死んだ。疫痢であつた。

一日の朝、小康を得た時、医者は「或は助かるかも知れないが、引き付けが来たら、もう駄目ですよ」と言つた。眠っている弟の枕元で、好きなことは何でもしてやるから、どう

か、なおっておくれと、心のなかで只管願った甲斐もなく、
昼、突然烈しい痙攣が起って昏睡状態に陥り、夜に息を引き
取った。もっと可愛がってやればよかった。私は無限の後悔
に襲われた。

法名 釈智潤童子

気丈な母は人前では涙を見せなかったが、気が狂う程悲し
かったに違いない。弟の学用品、玩具、絵本そのほか、思い
起させるものすべてを焼き捨てた。私はそれを手伝いなが
ら、仮名文字合せの木片一枚と、弟が白い木綿糸で輪に通し
た数珠玉の実を、そっと拾い取って、大切に仕舞いこんだ。

.....

マーガレット・オギルビイは、ジェイムズ・バリーが母の
想い出を綴った作品である。

バリーの兄さんは幼くて死んだ。母親は筆笥の抽出しに仕
舞った形見の服を取り出して眺めては、幼いバリーに、兄さ
んはお前にそっくりだったが、お前よりはずっといい子だっ
たと、嘆くのが常であった。バリーは自分が兄と瓜二つと聞
いて、母に兄の姿を見せて喜ばせ度い一心で、或る黄昏時、
ひそかに兄の形見の服を着て、突然、母の前に立った。

.....

幼い子供の死ほど、哀れで悲しく、やり切れないものはな
い。幼くて死んだ子は、どの子もみんな、いい子達である。
仏様や神様は、いい子を膝に呼び寄せるのであろうか。

はやし言葉

子供のはやし言葉には色いろある。私の子供の頃には、男
の子と女の子が仲よく遊んでいると、

女と男と豆炒り

炒っても炒っても炒り切れない

こんなのはやし言葉がなくなつたのは、仕合せである。

.....

いくじなしに対して、子供達は容赦がない。

泣き虫毛虫、挟んで捨てろ

.....

泣いていた子が、急に機嫌を直して笑ったりすると、

今泣いた鴉が、もう笑った

.....

自慢する奴をはやすのに、

お前は偉いよチャンゴノチャンだよ

剣術使いの癪だらけだよ

意味は極めて明らかだけれども、チャンゴノチャンは何だか分らない。

.....
エーノガチヨ、エーノガチヨ

これは、馬糞を手摺みにしたり、死んだひき蛙をつまみあげたり、とに角、汚いことをした奴を、はやす言葉だが、さて、エーノガチヨの意味が分らないので父に聞いてみた。父も、何だか分らんなああと、暫く考えていたが、

「因果のちようかな」

と眩いた。千早振るではないけれど、エーノガチヨは因果かも知れないが、チヨは今もって、何だか分らない。広辞苑にもエーノガチヨは載っていない。

孫に聞いてみたら、此の頃の子供はエーノガチヨとは言わないで、ベンベンとか、ベベーンとか言うらしい。これも何だか全く分らない。

誘っても遊び仲間に入らない旋毛曲りをはやすのに

いやならよしゃがれ

よしべの子んなれ

べんべん弾き度きや

芸者の子んなれ

この、はやし言葉は中勘助の銀の匙にも載っている。中氏の生年から推算すれば、それは明治二十年代のことであり、私の子供時代は大正のはじめだから、ずい分長く続いたものである。だが、私の息子達の時代——昭和の二十年代——には、文句はすっかり変っていた。

いやなら新橋があらがら

お前のとっちゃんくるま曳き

「いやなら新橋」とは起し得て甚だ妙であって、「よしべの子んなれ」よりも、作柄が遙かに優れているようである。第一、格調が高い。如何なる天才児の作であろうか。

(明星大学)

わたくしの
シルクロード ⑩



横張和子

アジア絵画展望 (その一)

西域北道クチャ・スパン出土の舍利容器を飾っている彩画は六七世紀ころの西域のオアシスの住民の風俗をよくあらわしていると共に、また西域絵画の特徴をみせていて、アジア絵画の資料として珍重に値いするものと言えました。ことに人物などの輪郭をくくると強い粘りのある墨書きの線は特に「鉄線描」といわれて、絵画様式史の上で注目されることはすでに述べました。奈良

法隆寺の金堂内部を壮麗していた壁画の描法に見出され、絹の道はまた絵画様式を東方の最果てにも運ぶ道であったことがうかがわれます。

今回は日本の古代絵画をも含めて、広くアジア絵画の展望をその様式史の上からこころみたいと思います。上代の絹織物の技法を深く中国に負うた日本は絵画においても中国を模範としました。それゆえまず中国画から述べていきたいと思います。

世界的に古画的完成を遂げた中国絵画の本領は伝統的に線描にあります。それは「骨法用筆」として尚ばれ、描かれた線には



▲図版① 鳥毛立女屏風 奈良

品位が与えられました。画家達はそれにより絵画の究極の理念である「氣韻生動」を実現するためにその生命を賭けたのでした。玄宗治世（紀元七一二―七五六）の盛唐の画家呉道玄（子）は「才思遠」にして「筆を下すこと神助あるが如し」といわれて、当代随一の大画家としてもはやされ、長安や洛陽の大寺院の壁画の制作日に寧日なかったといわれます。かれの揮う筆の勢いは迅速に飛動して、勢い余って粗放に走ったともいわれています。筆先を打ち込み、力を抜き、再び力を加えて、すばやく描き切るその筆描のために、線に肥瘦が生じて、弾力のある、霸氣溢れた

▼図版② 永泰公主墓壁画 紀元702年



描画であったということです。かれの遺作は今日みることはできません。しかしわが正倉院の麻布菩薩像に呉道玄流の線をみるこ
とができるといわれています。また同じ正倉院の北倉の鳥毛立女
屏風をみますと、各扇とも立樹や右に唐風の女を配したいわゆる
西域に流行した「樹下人物図」です。顔の部分を除いて衣服など

には日本に棲息していた山鳥の羽が貼りつけてあったのですが、今はその羽毛がすっかり剝落して、下絵の線描がみえています。

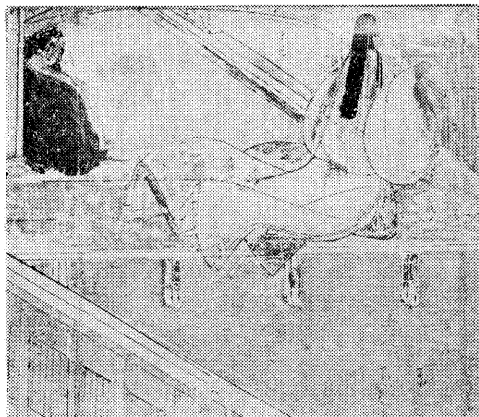
問題はこの下描きの線です。麻布菩薩像ほど筆勢はなく、線の肥瘦も著しいものでなく、おだやかで、のびやかなものになっています。しかしなお生動に富んだ線です(図版①)。

ここで想起されるのが中国解放直後に着手し、発掘された永泰公主の墓の壁画です。則天武后の怒りをかけて、十七歳の若さで死を賜った不幸な皇女の死を悼んで、父中宗の復位と共に神竜二年(七〇六)の梁山の麓に壮麗な墓が営まれました。揮図はその墓の前室東壁に描かれた壁画です(図版②)。一皇女の墓に過ぎませんのに、壁画の作行は非常に優れていて、一級の画家の下に描かれたものでしょう。構図が複雑で、人物はその一人一人が表情や年齢の相違が描き分けられ、頭髮や衣服なども適確に表現されています。それらが可能とされるのも微妙な抑揚のある墨書きの線によっています。その線描はさきの鳥毛立女の下絵の線と相通ずるものがあります。鳥毛立女の下絵を描いた画家は日本人でしょう。日本人が唐朝の絵画を手本としながら、もっとも日本人が目にし得たのは遣唐使などが中国から船載してもちかえった画卷の類いから得たものにせよ、天平時代には十分に、その技術を自己のものにしていたことが分ります。

それはやがて、国風化の趨勢に従って「やまと絵」の中に流れていきます。「やまと絵」は日本人の心情にもっとも適った、もっとも日本的な絵画であり、日本文化史上、はじめて手にした固有の絵画様式です。「源氏物語絵詞」などの優雅典麗な世界はやまと絵の典型的な画風とされています。しかしその濃彩の下にあらわれた下書の墨線は奈良時代以降のアカデミックな技術を継承していることが認められています(図版③)。やまと絵の中でも絵巻物には二種の様式があって、源氏物語絵詞のようなものは平安貴族の女房たちの手すさびあるいは教養的なたしなみとして描かれていた「女絵」の系統に属しますが、今日残るような芸術的にも品格の高い作品は官宮の「絵所」で、専門的な男性画家によって製作されていました。絵所では史上に名を残しているような有名な画家をリーダーとして、その下に多数の画家がいて、分業で制作が進められていきました。仕事の中で、もっとも重要なのは、作品の構図を考えて、下書の墨描きを行なうことと、彩色後の仕上げの墨の描起しをすることで、それは「墨書」という役職名のあるリーダー格の主任画家が当たったことが古文書から知られています。

源氏物語絵詞の作者として伝えられている藤原隆能もそうした主任画家であったのですが、しかし、今日名古屋の徳川美術館や

東京の五島美術館に伝えられている断簡についてはその作者は確かめられていません。何人かのリーダーダ格の画家の下で制作されたらしいことが調査の結果分っています。源氏物語絵詞と特徴づけているのはその「引目鉤鼻」ですが、これを描くのも「墨書」の仕事で、その出来栄えが作品の出来不出来を決定しました。それは決して一本調子の線を引き、また折り曲げて描いたというものではありません。細い墨線を幾重にも入念に描き込んでいて、それによりやわらかく、ふっくらとした王朝貴族の顔立を仕上げて



▲図版③ 源氏物語絵詞 (すずむし)
紀元 1200 年初め

いるのです(図版④)。一見すれば類型的、非個性的と評されがちなその独特な手法は、しかしその物語の登場人物の悲痛な、内に沈んだ深い心理や感情を露わに表現することを避けて、微妙なニュアンスで伝えようとするもので、それは当時の貴族たちの感情を作品に移して鑑賞する仕方に極めて適した描法であったといえます。線の動勢を極端なまでに抑えたこのような描法においてこそ、叙情性を身上としたこの時代の物語の画致が作られたといえましょう。

▼図版④ 源氏物語絵詞 (引目鉤鼻)





▲図版⑤ 法隆寺金堂壁画
(阿弥陀浄土図部分)

法隆寺金堂壁画は四つの壁面に四仏浄土つまり釈迦、阿弥陀、
 (図版⑤) 弥勒、薬師の浄土相を描き、白鳳絵画の代表作です。人々はこの壁画の描線に鉄線描の名を与えてきました。
 太宗治世(六二七―六四九)の画家尉遲乙僧は、ベルシヤ人で西域のコータンの出身の画家といわれます。かれの描くところは、『歴代名画記』に「屈鉄盤糸の如し」と評され、長安の慈恩寺に凹凸のある花の模様を描いたことで名をはせていました。この凹凸画とはどのようなものか、察するのに、ものの立体をあらわすために陰影法を用いたものではないかと考えられています。中国

▼図版⑥ 降魔図 キジール孔雀洞



では「応物象形」といえども骨法すなわち線描で実現しようとし、立体表現法としての陰影法は余り問題とされなかつたのです。しかしこの西域出身のへき眼の画家は彩色に暈しの法を用い

て凹凸の効果を出し、さらにそれを鉄線のような線描で、輪郭をくくった画法をもって、制作して、中国人の衆目を集めたのでしよう。

かれはまた長安の光宅寺に降魔図を描いたといわれています。

画史には「千快万状、実に奇蹤なり」そして「(釈迦の)脱皮せる白骨の意匠きわめて峻にして、また変形せる三魔女の身は壁より出するが如し」とあります。これを讀むと、西域北道のキジール孔雀洞の壁画の降魔図を思い起します。(図版⑥)苦行の果に骸骨のようになった釈迦が中央になお端然と座し、その左右から肌を露わにした美女が身をのり出して、釈迦を誘惑しようとする図です。様式化に傾きがちと考えられるアジア絵画がいったん造型のリアリズムに賭けるとこれほどまでに徹底した描写を行なうものかと驚きですが、過酷なまでにやせさらばえた肉体に浮き出た肋骨を描いた墨には、ただ線ばかりではなく、それにそって、暈しの陰がつけられています。自身の魔女の姿態を描く緊った強い線描の、その肉身の線にそって、朱の隈どりがほどこされています。尉遲乙僧の画技、すなわちそれは西域の画法でもありませんけれど、それはおおまかにいって鉄線描と隈どりの結合した手法であったことが推察されます。これがある距離をおいてみると、人物の像は平面の壁から立体的に浮かびでる効果があったと想像さ

れます。

アジアの絵画、中でも仏教絵画の立体表現は紀元一世紀の末ごろ西北インド・ガンダーラの地にギリシヤ式の仏像があらわれたことと無関係ではないでしょう。東方の所産である仏教が、西方の造形、ことにその中樞をなしていた彫刻に技術を学んで、仏・菩薩の像を刻んだのと同じように、仏教絵画もギリシヤ式の絵画技法を学んだとは容易に考えられます。中国僧玄奘法師もまたというインド・ナガラハラに仏影窟の仏画像は近づいてみると朦朧とし、遠くからみると、そのお姿が把握し得たといい、これはおそらく輪郭線のない、色彩のみの画法であったことが考えられます。それはあたかもボンベイ画の後期のものにみられる色彩のタッチの粗放な、一種の印象主義的手法を用いたものかと考えられます。それは前にご紹介したアフガニスタンのベグラムで発掘されたガラス器の彩画とも共通しています。

このような絵画の手法はガンダーラよりも東の西域南道のミラン古址の壁画に見出すことができます。これらはイギリスの探検家A・スタイン脚によって発掘され、壁から切り離されて、現在インド・ニューデリーの国立博物館の中央アジア部に陳列されています。十年ほど前に、これをみに行ったのですが、インドの激しい戸外の日射しになれた目で、ややほの暗い部屋に入り、こ

れをみたとき、それは千数百年の年月、砂漠に埋れていたものと
はとも考えられないほど、みずみずしい鮮やかな色彩をみせて
いました。挿図は第五址の仏塔の周歩廊の外側の壁の腰張に描か
れていた絵様帯の一部で、建物が崩れて、日干煉瓦の土が堆積し
た中に埋没していたもので、それがかえって保存を助けていたの
です。

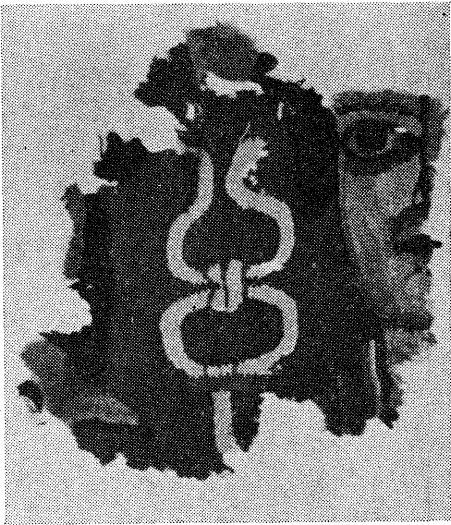
絵様帯は花綵（ガーランド）を担ぐ天使たちで、その間に各種
の民族衣裳をつけた人物が描かれています。中で一きわ目を惹



▲図版⑦ ミーラン第五址壁画部分
3世紀末

くのが巻髪の少女です。（図版⑦）少女は黒い髪を後に束ね、赤い
大きなイヤリングをつけています。そのかたわらに一筋の髪の毛
をカールさせているのが一層魅力的で、スタインの発掘品を整理
したH・アンドリュクス氏は目録解説でこれを“Kiss curls”と愛着
をこめて、記しています。頭には白地に赤い花の模様を並べたデ
ィアデムをかぶっています。つぶらな大きな目、つややかな口
唇は可憐です。左肩にかけて、淡黄の上衣に緑のストールをかけ
ています。大らかな遠くをみるようなまなざしは彼女の故郷が遙

▼図版⑧ ローラン出土の綴織壁掛断片
3～4世紀



か西方にあるかのようにです。ここで注目すべきは人物の肉附法です。よくみると淡紅色と灰青色の細かな色のタッチを重ねて、微妙な陰影をつけ、人体の自然な肉付け（モドレ）を行なっています。しかしそれにもかかわらず、顔の輪郭や目や鼻また耳などの細かな部分は赤褐色の線で、再び形作られ、首筋には仏画でみるような三すじの線が約束のような描き方で描き込まれています。気分においては西方的ですが、線の描出がみえてきて、東方化の傾向がみえてきています。壁画の製作年代は三世紀のわりごろとされています。この時代ミーランに近いニヤの遺跡から、木簡の封泥に押されていた印章の図にギリシャの神々の姿がみえていたり、彫飾りのある椅子の木彫のモチーフにアカンサスなど西方系の模様を用いているものがあつたりすることと考え合わせると、これは興味深いことです。

このような作品をもう一つあげてみましょう。織物なのですが、スタインがミーランの東、ロブノールの北頭のローランの遺跡で得たもので、毛織壁掛けの断片です。（図版⑧）中央の紐状の形はヘルメスのシンボルともされていますが、スタインの解釈では、ここに織り出された人物は釈迦の弟子であろうということですね。ガンダーラ美術と同じような手法であるわけです。象徴的な図形を真中にして、左右に異なる人物が配されていたものよう

ですが、左方の人物の姿はこれではみえず、わずかに髪と頬の一部、それに着衣の衿の部分らしいのが残るのみです。右方の人物も顔の大半を失っていますが、大きく見開いた眼やひきしまった口許にミーランの少女と同じ顔つきを認めます。赤く織り込まれた糸は血色のよい若者の肌の調子をあらわしています。顔の輪、眉、鼻筋は褐色の線で強く描かれ、目や鼻の下など影になる部分には暗色の隈どりがほどこされています。それはもはや色の面となって、固定してしまっています。しかし若者らしい張りの

▼図版⑧ 毛織タピストリー断片 シリア
あるいはエジプト 紀元3～4世紀

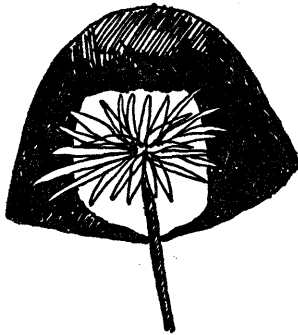


ある肌の調子はミーランの少女のそれを基本的には同じ細やかな暈しの手法がとられていて、その効果をだしています。顔を描くことではなお自然主義的な描写の配慮がみられますのに、衣服の扱いとなると衣の襷は黄土に紫の濃淡を層的に並べてあらわしています。色の明暗の推移が便化して隈どりとなっていくのです。年代は三〇四世紀とされています。

もう一例、これも毛織のタピストリーの断片です(図版⑨)。これはシリアあるいはエジプトの産とされるものです。人物のモデリングはローランの釈迦弟子に共通していて、細やかな明暗のタッチも用いられていますが、鼻筋から顎などの暗色の線や眉や眼などの部分は中国の京劇やわが国の歌舞伎の役者の隈どりを想い起させます。豪華な服飾や背後の円光のようなものから、この婦人が高貴な、神話の人物をあらわすもののようにですが、表情は暗く、東方の若者や少女が遠く西方を夢みて、明るい表情をしていたのに比べて、これは違います。この婦人の、この表情は、ヘレニスティック末期のローマ世界にあらわれた終末思想を表徴しているといわれます。これも三〇四世紀の作品です。シリア絵画については次回にも述べますが、このようにギリシャ人が案み出した色彩の明暗調を用いて、ものの立体や人物の丸味をあらわす手法はそれが波及すると共に便化の傾向をたどり、面や線に置き換

えられていく様子をみせています。しかしこれは単なる手法上の変化とのみとらえることはやや皮相な観方のような気がします。陰影法が隈どりの手法になり、それに鉄線描が結びつくというのは、この時代、精神文化に強力な変革が生じてきたからです。すなわち古代世界は終末を告げ、中世の時代を予告して、この種の絵画様式が生まれてたものでしょう。それは東西にわたって広い範囲にわたって行なわれた一種の国際的な様式であったと考えられます。

(続く)



『復刻・幼児の教育』〈大正・昭和篇〉

〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児教育の発展と歩みを共にして来た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究発表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の発展に測り知れない寄与を成して来た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』（第一期・明治三十四年～大正九年）に続き、大正十年～昭和十九年の二十四年分、二十四巻を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、

現代保育を考える人々に資することを念願する。

〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引

〈第二一巻～第四四巻〉大正十年～昭和十九年

『幼児教育』（第二三巻第八号まで）

『幼児の教育』（第二三巻第九号以降）

〔刊行〕 名著刊行会

〔定価〕 現金価格二二五、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三二二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五―三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江三一六―二三

TEL (〇六) 五三一―九八〇一

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方が、優れた論文をおよそくいただきますことを、期待しております。

〔記〕

- 一、第一期、第二期の復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。
- 一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで
- 一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品

- | | |
|--------|--------|
| 最優秀賞一名 | 賞金二十万円 |
| 二等賞 二名 | 五万円 |
| 三等賞 三名 | 一万円 |
| 参加賞 全員 | 記念品 |

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問い合わせ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属
幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問い合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

クダケスタン・ジャポニ（イランの日本人幼稚園）②



進藤君枝

世界のどこかで、大きな飛行機事故が起こるたびに遭難者の中に日本人が含まれているのではないかと、心配される昨今です。それほど世界各地で日本人は活躍するようになりました。そのため父親の仕事の関係で、やむおえず海外で生活する子供の数も年々増加の一途をたどっています。

現在、海外には日本人学校が77校あります。ここでは文部省から派遣された日本人教師によって日本の教科書を使用した教育がなされています。中学校・小学校教育に対しては、国からの援助

が考えられるようになってきていますが、これからも海外日本人学校又帰国児童の受け入れに対しては、大きな課題となつてゆくのではないかと思います。

しかし、海外在住の学童の教育問題については考えられるようになっていますが、乳幼児の問題については、全く考えられないのが現状です。そのような中であつて、中近東の中でも早い時期から企業進出がめざましかったテヘランの地では、学齢以前の幼児の教育が問題となり、在留している学齢以前の子供をもつ

母親が中心となり小さな会ができました。当初母親が中心となり子供を預るということでしたが、いろいろな問題が生じ日本から正式の資格を有する教師を招くことになりました。そして一九七三年テヘラン日本人幼稚園が設立されました。私はテヘラン日本人幼稚園の四代目の園長としてテヘラン入りをしたのです。テヘラン日本人幼稚園の運営は、在園する園児の保育料と日本人会からの援助のみで運営されてきました。

私は、日本人幼稚園教諭として赴任することが決まっていたにもかかわらず、ひとつの大きな疑問をもっていました。外国の地までいってどうして日本人同士が集まらなくてはならないのか。せっかく外国で生活する機会があったえられたならば、現地の人々と交わることによって、その中から子供たちは、多くの問題をとらえて成長してゆくのではないかと……。しかしこれは、安易な考え方でした。テヘランにおいては、余りに違う国民性・風俗・習慣・言語の問題又長く滞在しても五、六年、短かくて二年その地に根をおろすことのない人々にとって、又成長期の子供にとっての教育問題は、簡単に解決される問題ではなく、海外で生活している人々が真剣に考えている大きな問題であるということに気づかされました。

一九七六年頃から一九七八年までは、テヘランの町は、活気に満ちあふれていました。町は超高層のビル、ホテルの建築ラッシュ、町のスーパーマーケットには、全世界から輸入された食料・雑貨が山のように積まれていました。交通事情の悪いテヘランの町に、地下鉄・モノレールを作る計画がでていたのもこのころです。当時パルビ国王はあふれでるオイルダラーをつかって、急激に近代国家作りをしようと急いでいたのです。工事関係者、商社、金融機関の日本人駐在員の家族が増えてきました。日本人幼稚園に毎日入園を希望する親子が一日に二、三組来園します。義務教育上入学を希望する児童を待たすことのできない学校の方は、より問題が深刻でした。当時イランの将来は明るい見通しとされており日本人駐在員の増加も考えられておりました。そのため日本人学校の新校舎建築の話が急がれていました。日本人幼稚園も学校が建築されたおりには、その一部を使用して保育を続けると計画がたてられていました。イランがこのようになってしまった現在そのような話は、まるで夢のような出来事だったように思えてなりません。

テヘラン日本人幼稚園は、高級住宅地ナフト通りの一番街にあります。まわりには、塀の高い大きな住宅がたち並んでいます。町は日中でも人通りが少なくシーンと静まりかえっています。こ

の地域の子供はほとんど外にはできません。外にでも必ず親やお手伝いさんが付き添っています。子供同志が寄り集まって遊ぶ姿などみかけることはありません。定員が一杯で入園できない日本から来た子供は母親と一緒に一日中広い家の中にいなくてはなりません。交通事情の悪いテヘランでは母親は余り外出をしませんし、又でかける所もないのです。日本で幼稚園の生活を経験した子供にとっては満たされない毎日だったと思います。

砂場作り

一人でも多くの子供のためにと考え、日本人幼稚園では可能な範囲で年長児から優先的に受け入れました。子供たちが取り組む遊具があまりありません。はじめに砂場を作ってもらうことになりました。父母の会で父親の協力で砂場作りをして欲しいことを訴えました。休日は退屈しきっている父親たちは大喜びです。保育室が狭いので少しでも園庭を使用できればということでも日よけを作ってもらうことにもなりました。(六月以降十一月までほとんど雨は降りません。日かげさえつくれば戸外も保育室の延長として使用が可能でした。)設計図もひかれ、どこから、太い立派な鉄パイプも運びこまれました。立派な砂場と日よけと鉄棒ができ上りました。子供たちも父兄も大喜びです。父親たちは、作業

を終ったあとと言いました。「これこそたくさんの日本企業が参加してできた大きなプロジェクトだ！I・J・P・Cよりも先に完成したイランにおける大プロジェクトだ……。」と冗談をいいあいながら喜びあいました。砂場ができたが、赤土・泥はたくさんあるので、砂はあります。カスピ海の砂を運んでもらうことになりました。このように皆の協力でき上った砂場で子供たちは、毎日どろんこになって遊びました。

ヤゴおじさん

イラン人は子供を非常にかわいがります。彫の深い目の鋭いひげのもじやもじやの顔で抱きしめ頬にキスをあびせてくれます。子供たちは、びっくりします。そして泣きたす子供もいます。又愛情の表現として顔をつねったりします。そんなわけでそれが愛情の表現と受けとることのできない子供は、イラン人は嫌やだにげまわることもしばしばありました。又イラン人は子供は何もできないもの全てに手をかけてあげなくてはいけないものと考えています。イラン人幼稚園には、必ず教師の他に一人の若い女の子がいます。子供が何かを要求した時すぐに答えてあげられるためです。六歳の子供がトイレに行くときもついて行きズボンを脱せ、パンツをおろし手伝います。

日本人幼稚園にも一切の雑用をひき受けてくれるヤゴおじさん夫婦がいます。ヤゴおじさんも子供に対してははじめはそうでした。はじめてのお弁当の日です。年長の当番の子供たちが食事の用意をはじめました。椅子・机を用意しそして机をふきます。私達にとっては当然の子供の仕事です。ヤゴおじさんは、あわてました。「ミス・シンドウ！これは私の仕事だ。どうしてこんなことを子供にやらせるのか？」びっくりした様子です。私は、はじめおじさんが憤慨した意味がわからなかったのです。「おじさんの仕事は子供たちに行きわたることです。子供たちができることは、子供たちにやらせるのです。」おじさんは納得しました。ヤゴおじさん夫婦には、主に幼稚園園舎の管理をしてもらいました。保育の補助としては、駐在員の若い婦人方で子供をもたない子供の好きな方に交代で毎日三、四名ずつ手伝ってもらいました。

ある日のことヤゴおじさんが「ミス・シンドウ 私の孫もこの園に入れて欲しい。同じように月謝もだから……。」といわれた時はびっくりしました。ヤゴおじさんは自分は、日本人の教育に多少でもかかわっているのだということを変装誇りにしているようでした。私は子供たちの生活に変化をつけるために子供たちと一緒によく園外へでました。そのような時に、彼は普段着の洋服を背広に着がえ革靴をはきさっそうとでかけるのです。子供たち

のために、交通整理をしてくれるのです。よく働くおじさんでしたがおじさんに比べおばさんは働きません。私がおじさんに行くら注意してもなかなかおおりません。他のイラン人にそのことをこぼしますと言われるのです。「ミス・シンドウ イラン女性は働かないもの。家にいるものということがあたりまえなのだから……あれだけ働けばいいではないか。イラン人からみればあなたの方が不思議なのだから……イランの国まで一人できて園を切りもりしていること、びっくりすることなのだよ。」と。

ヤゴおじさんに一つだけこまることがありました。それはラマザン（断食月）の時です。おじさんは日の出から日没まで一切のものを口にいけないのです。そのような生活が一ヶ月近く続くのです。暑い四〇度以上の日中、水も飲まず食べ物も口に入れず働くのです。力がなくなってしまう木かげに座りこんでしまします。しかしラマザンがあげますといつもの元気なおじさんに戻り働き続けてくれました。

いくつかの行事

毎日の生活が単調なため、家庭では日本人同志が集まりパーティーがよくもたれます。幼稚園でも子供たちが主催しお客様を招くいくつかの会が計画され、子供たちは、自分達が主催するパー

ティーを喜んで計画しました。

。ひなまつり……………五段飾りのおひなさまを子供の家から借りてきてひなまつりをしました。みんなで飾りつけです。空カンを持ち寄って自分達のおひなさまも作りました。そして近所のインターナショナル幼稚園のお友達を招き日本から届いたひなあられをわけて楽しみました。

。七夕まつり……………笹は手に入りません。園庭のリンゴの木に飾りつけをし、願い事も書きました。イラン人手品師を招き夜は家族と一緒にユカタを着て夕涼み会をしました。

。やきいもパーティー……………イランでは一応日本で食べる野菜はほとんど手に入ります。しかしサツマイモとゴボウは手に入りません。落ち葉で焼いたジャガイモにたつぷりバターをぬっておいもパーティー。

。豚汁パーティー……………「おなべに水を八分：おだしの豚を入れて…………」豚肉はイラン人は食べません。おだしは牛肉です。持ち寄った材料を園庭で調理し自分たちでテーブルセットをしてのパーティー。

子供たちにとって「自分達で開くパーティー」大変楽しみなできごとだったようです。

不穏な動き

子供たちとの生活も試行錯誤の連続で一年が終わりました。イランの土地にもなれ一年の土台の上に新しい経験を積み重ねようとしている時、イランに不穏な動きが感じられるようになりました。下町でチャドルをつけていない女性が刃物でさされたり、何が起こりはじめたようです。今までは王様の悪口は、一言もいえなかったのですがモスク（イスラム教寺院）で僧侶が金曜日の集団礼拝の場で公然と王様批判をしたということです。当時日増しに王制打倒の動きがでていたのですが、パーレビ王はなんとか力でその運動を押しこもうとしていました。下町の方のみでみられたデモが山の手の方におしかけて来るようになりました。宗教的行事の日は政府が反対しても突然商店は休みになります。そのような時には日本人幼稚園・学校も休みになります。暑い夏が終り長い冬が来るまでの短かい一時子供たちと思いきり園外で活動したかったのですが、そのころ「外国人がねらわれている」外へでない方がよいとの噂が入りました。半信半疑でした。私たちの日常生活にはなんの変化もないのです。幼稚園の行事にも気を配り、各方面の方からいろいろな情報を得ました。だれも確実なこととはわかりません。しかし今のイランの状態から何も起こらない

かもしれない。でも何かが起っても決して不思議ではないといわれていました。突然幼稚園が休みになったり、母親たちが荷作りをはじめたり子供たちも何かを感じはじめました。

一九七八年九月このように反王制の力がうずをまきはじめてころ当時の福田総理がイランを訪ずれ日本政府としてパーレビ体制により強力な援助をすることを約束しました。その夜のことで、イラン全土に戒厳令がひかれました。多くの会社から駐在員家族の引きあげ命令ができました。毎日のようにお別れ会をしました。着任してから一週間位の子供もいます。「先生ー何もなかったらすぐにイランに戻ってきますから……」。身辺の荷物をもって半信半疑のまま帰国した母子がほとんどでした。七〇名近く在園していた子供が三週間のあいだに二十名になってしまいました。

戒厳令がひかれ軍政に入ったにもかかわらず王制打倒の声は大きくなるばかりです。王制打倒の呼びかけで大規模なストライキもはじまりイラン全土が停電になる日もありました。十二月はじめのアシュラの日（イスラム暦最大な宗教的儀式がおこなわれる日）に何か大きなできごとが起こるであろうという噂がひろがりました。

三〇〇名近くいた日本人学校も五〇名になってしまいました。

幼稚園は十二名です。幼稚園の役員の方々もそれぞれ会社の命令で帰国しました。P・T・A会長も家族は日本に戻しロンドンへ一時的に脱出することになりました。停電が続く中女性一人の生活は大変であろうとの配慮で私も二学期終了を少し早めて日本へ一時帰国することになりました。

夜半、外出禁止令をやぶり家の近所からも「アッラー アキバル アッラー アキバル」（神は偉大である 神は偉大である）との叫び声がきこえはじめました。

幼稚園も宿舍もそのままにして二週間の帰国とおもって日本に戻っている間にパーレビ王がイランの地を去りホメニ師がテヘラン入りをしたのです。

イランの政情が落ちつくまで私は日本に滞在するはめになりました。

そして翌年の六月、ホメニ時代のテヘランに戻り今度は小さな小さなテヘラン日本人幼稚園を再開しました。（続く）



『よるべなき両親』

M・J・ランゲフェルト著

和田修二監訳

玉川大学出版部

で見つめ直すところからやり直してみよう
と児童学を学び始めたのだが、そういう時期に出合った最初の感銘深い書物がランゲフェルトの『教育と人間の省察』だったのである。

「人間は内から形づくられ」「それぞれ自己自身に対する内的関わりをもつ」

書評を書くように言われて、ランゲフェルトの最近の講演集である『よるべなき両親』を手にした時の私の思いは、なんと複雑なものだった。

三年程前、私はランゲフェルトと大変意味深い出会いをしていたからである。

それは私が保育学研究室に入れていたいたばかりの頃であった。母となり四年目のことで、子どもとの一体感に自分を生かし切り、「導く前にいたわるべき人、教える前に慰むべき人」(倉橋惣三)であったといわれる「日本の母親像」に

identityし切れない自分を感じながら、

かといって「家庭と仕事の両立」とい

い、昼は仕事、夜は育児と人格を使い分

けるような生き方にも同一化できずに対

極にある二つの価値の間を振れ動きなが

ら、なんとかして自分なりのあり方をつ

かみ子どもとの日々をもっと安定した落

着いたものにしたいと感じていた。それ

には、迷いの渦の中でもがいているだけ

でなく、こんなにも私の中に入り込み、

私の今までを根こぎにする存在である子

どもとは一体何なのか、少し距離をおい

「人間は決してすでに出来あがった人間として生れてくるのではなく、まず子どもとして生まれ」「子どもは教育によって始めて人間となる」。「一人人間は何故生きていくのか、そして何故仕事をし、危険を冒し、緊張と抑圧に満ちた日々を送るのであるか。この疑問に対しては、

ただ我々が価値を経験し、その実現の為に生きている、と考える以外にない」。

価値の実現は主体の自己決定と深く関わり、人間にとって「自己決定は真に人間の名にふさわしい実在の創造である。そ

して人間が自らを決定しなければならぬ存在である事が、実は人間にとって教育が必要であり、かつ又可能であるゆえんでもある」。「人間が自らつくり出す最高の作品たる人間自身と、その世界の創造に対して教育という営為における人と人との関わりこそは、本質的かつ第一義的に、しかも国や時代をこえて普遍的に貢献する重大な積極的行動なのである」

という形で表現されたランゲフェルトの人間観、教育観、感動的な実践例は子どもの事、保育の事を学び始めたばかりの私には、余りにも偉大過ぎるものであったが、続いて読んだ彼の『続人間と教育の省察』のある箇所はその後の私にとって大きな意味をもつものになったのである。その箇所を引用して以後の私の歩みを述べて書評にかえたい。

「動物は必然的な過程として発育し、必ず大人になるが、人間は必ずしも無条件

的に成人になるとは限らない」「子どもが人間として成長してゆく過程では『自然』から『文化』への移行が是非とも行なわれなければならない」それは「脱自然化」の過程と言うこともできる。その過程の中で「成功したかに見えても、子どもの態度や行動のしかたが、どこまでく不自然に見えたり、子どもの内にできれば自然のままに、気ままに振舞いたいという願望が潜んでいる場合は、教育するものがへ自然によって規定されている在存」としての子どもをへ文化によって規定される存在へと導きもたらすに当って、子どもの内なる如何なるものをも壊すことなく極めて自然な形で事を運ぶ術を心得ていないために起る失敗である」「子どもにおける自然から文化への移行がもし順調に進展していないように見える場合、なによりもその子に対する教育が不十分不適切ではなかったかとい

うことがまず第一に問題にされなければならぬ」「なぜならば食餌、排便などに際して子ども自身がそれをコントロールできるように躡けることは彼の内なるものに何らショックを与えることなく実現することが可能であり、事実まことに正常に首尾よく行なわれているのが通例である」という箇所である。

私は子どもの食事、排泄、その他の基本的習慣づけに、大きな時間と労働を費してきて、その頃もいわゆる躡などの問題でいつも子どもとの関係がギクシャクしたものになってしまうことに疲れ果て、母親失格を感じていたので、ランゲフェルトの、人間とその陶冶に関する深い探求と思索から生れたこの広大な書物の中では、言わば小さなものにすぎないこの箇所が深く心につきささったのだから。だから私の子ども学はその失敗を取り返し、適切な教育とは何かを探るとい

う課題を負ってスタートしたとも言えるのである。

その重い遅々たる歩みの途上で、私は子どもを人間の本質的原型的存在としてとらえ、子どもの行為をその内面の世界の表現として見るといふ保育の見方を学んだ。そういう視点にたつて、子どもとの生活を、とにかく楽しいものにするということだけを心がけて交りを重ねていくうちに、思いがけない時に今まで気づかなかった子どもの心の動きが見えてきて、素直にそれと向かいあい自然にそれに答えている自分を発見するという体験が少しずつたまっていった。それらの体験の一つ一つを何回もとり返して、その時の子どもと自分の間で起っていたことの意味を考え続けていくおもしろさとむずかしさ。そういう省察の道程の中で、食べることや排泄に関するエリクソンの理論にふれ人間の行為を考えるいろいろ

な立場があることを知って見方が広がった。そして今、保育の場にあられた人間の現象を私は独自の立場からとらえ、考えているに違いないということに気づかされている。なぜなら、保育とはその子と私が、多くの可能性の中からそれぞれの全人格をかけて選びとった一つの生をそこで共に生きることであり、それは今、目の前にいるその子の表現であると同時に私自身の表現でもあるから。

「自分自身の立場を意識化し、その立場でとらえたものを普遍的な人間の現象として他の人に理解してもらうための私の方法を確立すること」が今後の課題である。そこで私は、教育的人間学のすぐれた実践者としてのランゲフェルトの実践記録を是非みたいと思う。ランゲフェルトは「必然的に意味を伴う人間の『生』を追求する学問が従来のいわゆる『科学』とは全く異なるものであるはずだ」

と言っているからである。

このような道程を経て、『よるべなき両親』によってランゲフェルトに出会い直した私は、かつてとらえきれなかった彼の思想が自分にとってずっと身近なものになっているのを感じ驚いている。それは私が多分その間にランゲフェルトの理論を裏づけるような経験をいくつか持つことができたからだと思う。そういう経験によって彼の思想の意味の大きさをもっと奥深いところで理解できるようになった気がしている。

ランゲフェルトは『よるべなき両親』の中で人間を「絶えず自分の限界を突破し、自分の境界を乗り越えるという最高の可能性ゆえにかえて本質的に寄るべき存在である」ととらえ、「人間の歴史は本来自身がよるべないにも関わらずそのよるべなきに耐えて自分より無力でよるべないものへの愛のために、自らそ

の責任を引き受ける覚悟をした多くの無名の人々による日常不断の努力の集積として発展してきたのであり、そのようなおとなの元でのみ、子どもは子どもであることができるのである」といつている。

理性だけを見がき、合理性だけではつめられない人間の側面を見つめることを怠ってきた人類の生の所産であるこの現代は「人間的に生きるとは何か」という問いが真にさし迫って問われている時といえる。私はこの『よるべき両親』がそういう現代を生きるすべてのおとなに向けて「自分の限界を突破し、自分の境界をのりこえるという人間だけが最も最高の可能性」をめざして「揺るぎなき世界」をつくることを訴えた告発と激励の書として位置づけたい。

私は『よるべき両親』の中の「子ども

もとの日常的交りはおとなが子どもに対する己れの教育的課題と責任を自覚した時に教育に変わるのである」という理論によってランゲフェルトとの出会いを、私の「教育するものとして」の出發として位置づけ、その後の保育学の歩みを

「人生の意味に対する問いへの実質的な回答となりうる、責任のある、信頼のおける、有能な生活を創り、全きおとな」をめざす「自己実現」の道程の中でとらえる視点を与えられたことをおぼえておきたい。そして又、『よるべき両親』によって、「教育」と「保育」を自分の中で明確にしていくという新たな課題を保持したこともここに記しておきたいと思う。最後にランゲフェルトの考えの一つを裏証すると思われる私の体験を記してこの文を結びたい。

「真の従順さは屈從的反應ではなく、自

信を増すことから生れる態度である。この自信は隷従の上ではなく、正当な自己への信頼と確かな能力の伸長を経験し自覚することを通して生れるのである」

この夏休みも、娘は親をはなれて、知りあいの郷里で数日を過ぎてきた。去年は帰って来た翌朝、自分の背を私に計ってもらうという行為でその内面の成長の自覚を表現した娘は、今年は、見違えるような「従順」さでそれを表現している。自分から手伝いを引き受け、頼んだことも自信に満ちて片づけていくのである。この頃の我が家の動きは何と自然なことか。

ここで、今、子どもの中で起っているそのことを「従順」と言ってしまう一つの人間現象としてその意味を見極めようとするのが保育学の立場なのである。

(小宮山雅代)

ヘーゲルの論旨は、要約することが出来るが、フッサールのそれは、要約し難い。モネの絵は、何とか説明出来るが、ポール・クレーのは、かいつまんで説明することが出来ない。私どもを取り巻く事象は、どうやら、「要約し得るもの」と「要約されないもの」に二分して、とらえることが出来そうである。

ところで、人の一生の中で、最も要約しにくい時期は、「幼年時代」ではないだろうか。「幼稚園で何を体験し、何を獲得したか」と問われて、かいつまんで、要領よく説明出来る人は、恐らく、多くはあるまい。

例えば、ある人は、「お庭の大きな木に蜂の巣があった。蜂に刺されたとき、先生が抱いてお薬をつけてくださった」というような、想い出を語る。然し、それは、園生活の「要約」ではない。心の深みから、浮かび上ってきて言葉をつか

まえた、記憶の断片にすぎないのだ。

にもかかわらず、それは、その人にとっての、園生活のすべてをあらわにする。何故なら、それは、要約ではないが、園生活全体の「メタファー」なのだ。その人にとって、幼稚園とは、「思いっきり遊び、いたずらをし、困ったことが起きると、先生が温かく包んでカバーしてくださった」、そんな場所だったのであろう。そして、この想い出が浮かび上ってくる時、その人の現在は、幸福な幼年時代に逆照射されて、明るく温かな光で包まれるのだ。

因果律に則った合理的なものは、要約しやすく、その逆は、要約を拒む。人にとって、幼年期とは、まさに、因果律を越えた、不思議さに満ち満ちた世界なのだ。いま、送り出す子どもたちは、どんなメタファーによって、園生活をとらえ直すことだろうか。(本田和子)

幼児の教育 第八十巻 第三号

三月号 © 定価二七〇円

昭和五十六年二月二十五日 印刷

昭和五十六年三月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

キンダー 科学教材シリーズ

“科学する心”を育てる教材

★1セット(年間12点)4,200円 ★1点350円

●4月以降、毎月お届けいたします。

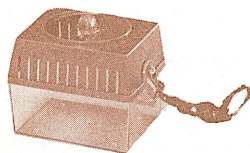
4月

さいばいセット
あさがおのためつき



5月

かんさつケース
(虫かご兼用)



6月

とけい



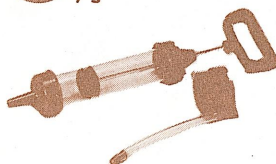
7月

そくせいさいばい
かいわれだいこんのたねつき



8月

みずてっぼう



9月

ふいね



10月

みずさいばい
ヒヤシンスきゅうこんつき



11月

まんげきょう



12月

いとでんわ



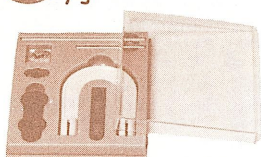
1月

はかり
おもりつき



2月

じしゃく



3月

かがみ
(せんぼうきょう)



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

フレーベル館の

月刊7誌 (価格据え置きです)

大きくのびゆく お子さまのための 月刊保育絵本



ワイド画面

情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック①-情操
4月号「おはなが いっぱい」
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円



豪華な上製本

幼児の美しい心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号「マリーさんの き」
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 300円



豪華な上製本

科学する心を育て自然に親しませる
しぜん-キンダーブック③
4月号「はるの むし」
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 300円

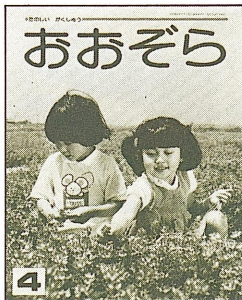


ワイド画面

観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック②-観察
4月号「みんな ともだち」
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円



子どもの自主性をのばし
ゆとりある保育を考える
保育専科-今月のカリキュラム-
●特集・これからの障害児保育
定価 350円



子どもたちの知的欲求にこたえるために
たのしい がくしゅう
おおぞら
●別冊・おかあさんの本
特別 あいうえおひょう・かずのひょう
付録 こいのぼりの工作
団体購読価 月 300円



特製厚紙製本

幼児らしい夢をそだてる絵本
キンダーメルヘン
4月号「ピンちゃんのおかいづつ」
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館